

納水

法華經講話

第二十一號

慧水會發行

特217

871

林一郎先生講述



始



頁 217
871

法華經講話

小林一郎先生述

第一百講

妙法蓮華經如來壽量品第十六（其五）

前回には、有名な自我憫の「佛及び大衆に散ず」といふ所までを読みました。今日はそれからあとを讀んでしまひたいと思ひます。

我が淨土は毀れざるに 而も衆は焼け盡きて
 憂怖諸の苦惱 是の如き悉く充滿せりと見る
 是の諸の罪の衆生は 惡業の因縁を以て
 阿僧祇劫を過ぐれども 三寶の名を聞かず
 諸の有ゆる功德を修し 柔和質直なる者は
 則ち皆我が身 此に在て法を説くと見る



或時は此の衆の爲に 佛壽無量なりと説く

久しくありて乃し佛を見たてまつる者には

爲に佛には値ひ難しと説く 我が智力是の如し

慧光照すこと無量にして 壽命無數劫なり

久しく業を修して得る所なり 汝等智有らん者

此に於て疑を生ずること勿れ 當に斷じて永く盡きしむべし

佛語は實にして虚しからず

佛様の眼を以て見る世界といふものは、物質を離れて居る、物質の影響などを決して受けませんから壊れないのだけれども、而も大勢の人間は、焼け盡きていろ／＼な苦しいこと、辛いことが一ぱいあると見て居る、それは心の尊いことを辨へないで、たゞ物質的の方ばかりを見る人間であるからどうも已むを得ないが、そこを離れなければならぬといふのであります。

それで『諸の罪の衆生』といふのは、折角佛に成るべき本性を持つて居りながら、その尊い性質を空しくして、煩惱に執はれて淺ましい生活をして居る、さういふ人間を残らず總括して言つた譯であります。世俗の言葉で言へば、泥棒や人殺をする者は悪人である、又人に欺され易いやうな人を

善人だと言つて居る、併し佛敎の本當の精神からいへば、人間は何時でも自分の全力を盡すべきものである、自分の業には何時でも出来るだけの力を盡すべきものである。然るに十の事をやれば出来るのに、五つか六つで止めてしまふのは、力の用ひ方が足りないのだから、これは悪い者と言つて宜い、また自分の力だけで一ぱいにやつて、それが世間に大した効果を及ぼさなくても、自分の力のあらん限りを盡してやるならば、そこからまた多くの善い事が生れて来るのだから、それは小さい事をしたのでも善人と言つて宜い譯でありまして、要するに善惡といふことはたゞ表面に現はれた所で決められるものではない。自分の力の残らずを盡すか、それとも怠けていゝ加減にして半分で止めるかといふことで大體決まる譯であります。罪を犯すといふのもその通りであつて、人を殺すとか泥棒をするとかいふだけが罪ではない、善い事が出来る境遇に居りながら、また善い事の出来る天性を持つて居りながら、怠けていゝ加減にして、何も善い事をしないならば、それは大きな罪を犯して居るものと言へる譯です。ですから法律の上でいへば一向罪にならない、また世間の風俗習慣からいへば別に罪人でない人でも、自分の心に顧みて、十の事をすべきものを六つや七つで済まして居たとしたら、これは罪を犯した、本當に悪い事をしたと考へなければならぬ。そこに宗教的の特に深い意味がある譯です。それを罪の衆生と言ふ、從來の行掛りに執はれて、懈怠の生活をしてゐながら、さういふ間を脱れ出る爲に、本當の教を求めるとか、道を求めるとかといふ考

へのない者が世間に多い。さういふ者が、所謂罪の衆生であります。

さういふ者は『悪業の因縁を以て』この悪業といふのも、今申すやうに人殺しや泥棒のみをいふのではない、完全な行ひをしないで、いゝ加減な生活を送つて居るのはみな悪業であります。その悪業に固まつて、不完全な行ひをして来た、さういふ行掛りから何時まで経つても本當の生活に入れない、阿僧祇劫といふのは非常に長い年月であります、その長い年月を経ても、『三寶の名を聞かず』三寶とは佛法僧のことで、佛と、佛の教説になつた教と、その教を世の中に弘める僧であります、この三寶の名を聞くといふことすらない、さういふ人が世間には随分多いのです。別に悪い事をしないでも、今の不完全な状態に安んじて居るのは、詰り教を求めるといふ心持のない人である。さういふ人は所謂三寶の名を聞かない、まあこの邊で……と言つて満足して居る。いゝ加減な事を毎日やつて居て、別に周圍から攻撃も受けず、監獄にも入れられない、まあこれで宜いではないかといふやうな考へで毎日を送つて居れば、何時まで経つても三寶の名を聞かず、即ち佛に歸依しようといふ心持も起さず、佛の教を聞きたいといふ心持も起さない、まあ世間で何とか言はれないで、その日／＼を無事に通ればそれで足れりとして居る。それでも世間の生活は續けて行ける譯でありますけれども、それでは一體人間が何しに生れて来たのだか、本當には判らぬ譯です。その根本のことを考へないでウツカリやつて居りますと、何時までも無意味に生きて行くのであります。

す。

併しさういふ生活を物足らなく思つて、教を求めて『諸の功德を修し、柔和質直なる者』もある、功德を修するといふのは、世の中の爲にも、人の爲にも役に立つやうな善い行ひを續けることです、これに依つて心が眞に正しく且つ柔和になる。柔和といふのは我執の念が全然なくなつたことで、現在の自己といふものに執着する心持がなくなつたことであります。世間では何時もニコ／＼して居りさへすれば、あの人は柔和な人だと言ふけれども、本當は我執がなくなることであります。人間は我執があつてはいけない、自分といふものはそんなに偉い者ではない、少し位物を知つて居ても、少し位金があつても、又世間の地位があつても、凡夫の生活といふものはそんなに尊いものではない。それに執着して、これだけ學問があるからモウ澤山だ、これだけ世間で尊敬されるから偉い者だと思つて居れば、そこで止つてしまつてそれより進むことは出来ない、また斯ういふ執着心が多く争ひを生むものであります。その現在の自分の状態に執着するといふ心持を捨て、行かなければ、本當の事は出来ません。その我執を捨てる事が即ち柔和であります。凡夫の儂い生活は詰らぬものだと思つて、本當に修行して行くと眞に柔和の人となるのであります。

それから質直といふのは、己を欺かず、人を欺かず、本當の心持で生きて行くことです。吾々はこの世の普通の生活をして居りまして、何かしら物足らないといふことを感ずるものであります。

何だか詰らない、何が詰らないのか判らぬけれども、普通の世間的の生活をして居ただけでは何となく物足りない詰らないと感ずります。それはどういふ譯かといふと、自分の心の底には、どんな愚かな人間でも佛性といふものがあつて、自分一人の満足を得るやうな生活をして居たのでは實際物足りない。だから心の底から、これでは詰らないといふ心持がむく／＼と湧いて来る、それが自分ではよく判らないが、人間の佛性であります。この世の物質的の生活をして居ては物足りない、その物足りないといふことは、モット進んで行けといふことを自分の本心が促して居るのである。そこに氣が付かなければ、何時まで経つてもたゞ物足りない、物足らないでおしまひになつてしまふ。ところが大概の人はその心持を自分で誤魔化して居る。それを眞直ぐに、その物足りないといふ自分の心持を誤魔化さしないで、眞實の道を求めて行かうといふ氣になれば、それが即ち眞直です。自分の本心の要求する所を少しも誤魔化さしないで、自分で勝手に妥協しないで、眞直ぐに求める所に向つて行かうといふ、斯ういふ心持の人が本當の道に入れるのでありませう。

斯ういふ風にだん／＼と本當の道を求めて行く氣分の人は、『我が身此に在りて法を説くと見る』我が身といふのは佛様のことで、佛は何時でも世に居て教を説いて居らつしやるのだ、佛の教はいろ／＼の形を取つて、様々の方面に現はれて居るのだといふことが本當に判つて来るのであります。

佛壽無量

さういふ殊勝な心で道を求め、教を求める者もありますから、佛は或る時には斯ういふ者の爲に『佛壽は無量なり』佛の生命は限りない生命であるといふことを説くのである。佛の生命が限りないといふことは、佛の説かれる教も永遠の生命を持つて居るといふことです。またその教が永遠の生命を持つて居るといふことは、佛の教に依つて修行する吾々も永遠の生命を持つて居て、終には佛と一致するぞといふことになる。だから佛の生命が無量だと言はれて有難いといふのは、吾々の身を取つて本當に有難いのです。何故なら、佛の生命が無限であつて、佛の教が無限に傳はつて居る、その無限の佛の教を絶えず修行して行くことに依つて、吾々自身も凡夫の境界を離れて、佛の境界に到達し得るのですから、それで非常に有難い譯であります。吾々凡夫と關係なしに、佛がただ一人で長く生きて居られるといふならば、それはえらいことではあるけれども、有難いこと、はいはれない、それでは吾々と無關係です。所が實はさうではない、佛壽が無限であるといふことが、吾々自身も結局凡夫の境界を離れて、佛と同じに成れるといふこと、斯ういふ關係があるのであるから、本當に有難い、この有難いといふことがなければ宗教としての價値はないのであります。また時に依れば『久しくあつて乃し佛を見たてまつる者には、爲に佛には値ひ難しと説く』とあります。これは容易には佛を見るといふやうな境地になれぬ者といふことです。斯ういふやうな者に對しては、佛に値つて佛の教を聞くといふことは容易に出来ぬぞ、餘程シツカリした心持でなけ

ればいかぬぞと、斯う言つて勵ますのです。何れその内に佛様が解るだらうといふやうな、生温いことを言つて居つては、何時まで経つても眞面目に修行する氣になれない、だからお前は佛様のことを眞面目に考へて居ないさうだけれども、佛様といふものはなか／＼容易に値ひ難いものである、その値ひ難い佛の教が世の中にあるのに、何故一心になつてこれを學ばないか、今を措いて再び斯ういふ機會は來ないかも知れないではないかといふやうに、聲を勵まして警告を與へて、さうして眞面目に修行するやうにしてやるのであります。

これは兩方とも必要なことです。佛の教は永遠に傳はるといふことを信ずるのは無論必要だけれども、またその佛の教を自分のものにするには非常なる努力を要する、坐り直して眞面目に考へなければならぬといふことを知るのも必要です。だから佛が永遠だといふことを考へると共に、縁がなければ佛の教に値ふことは出來ないといふことも能く考へなければならぬのであります。

佛の智慧の力はこの通りである、その智慧の光で大勢を照すことは無量である、どんな人間でも佛の智慧を以て照されない者はない、佛の力を以て救はれない者はない、さうして佛の壽命は無數劫で、限りない生命である、その佛の生命といふものも、久しく業を修して得る所である。これは善業を積んだ報としての壽命といふので、その本佛の壽命との關係に就ては、前に詳しく説いてあるから、そこを参照して戴きたい。世の中に出て菩薩行を積み、世を救ひ人を救ふ働きをだん／＼

積み重ねて行つて、その結果として得た壽命だけでも眞に無量なものである。

そこで『汝等智あらん者此に於て疑を生ずること勿れ』眞に智慧のある者は、これを疑つてはならない。この智慧といふのは、申すまでもなく普通の世間的の智慧を言ふのではなくして、人生の本當の意味、凡ての物の存在する眞の意義をシツカリと見極めようと努めて止まぬ者を智有らん者といはれたのです。たゞいゝ加減に物事の表面だけを知つて、それで澤山だといふやうな智慧ではない、そんなものは洵に他愛のないものですが、本當に人生の眞の意義を突止めようといふ考へのある者、またさういふ考へに眞直ぐに進んで行く者は、今申したことに就て疑ひを起してはならない、必ず永遠のことを考へて行かなければならない。さうして『當に斷じて永く盡さしむべし』斷じて永く盡さるといふのは、虚偽の生活を全く離れることです。人間は兎角に眼の前の事に執はれたり、詰らない迷ひに制せられたりしてうつかりした生活をして居る、それが佛の教に入つて、初めは低い教を學んでも、それからだん／＼深入りして行きますと、結局は菩薩行を積むことが出來て、一切何ものにも執はれる心持がなくなる、即ち今までの虚偽な、假の生活をスツカリ離れることが出来る、永く盡さるといふのは斯うなつて再び元へ戻つて來ないことであります。眞實の生活をすることが出來れば、モウ今までの虚偽の生活に戻つて來る譯はない、併し餘ほど修行を積んで行かなければさうはならぬのであつて、吾々でも時に依れば佛様のやうな尊い心持が心に浮ぶこと

もある、またお経などを讀んで居る時には、人生の詰らない欲望などを離れた心にもなりますけれども、併しそのお経を閉ぢてしまひ佛の姿に背中を向けてしまふと、忽ち元の凡夫の心が起つて來る。けれども今の自分がさうだからといつて失望してしまつてはいけない、それでも屈しないで佛を慕ひ、佛を仰いで修行して居ると、結局は永く盡きるので、モウ後戻りしないやうになれる、斯ういふことを佛様は請合つていらつしやる。それは容易ではないが、幾度も後戻りしてはまた出直し、また後戻りしては出直して、その信が何時までも變らなければ、佛様のお力がこれに加はりますから、結局は凡夫の境界を離れることが出来る譯です。

『佛語は實にして虚しからず』今の吾々には自分が將來佛に成れるかどうか見當は付かぬけれども、佛の言葉は眞實であつて、決して偽りのないものであると仰せらるゝのであるから、これを信じて一心に修行を勵むべきであります。

醫の善き方便をもて 狂子を治せんが爲の故に

實には在れども而も死すと言ふに 能く虚妄を

説くもの無きが如く 我も亦爲れ世の父

諸の苦患を救ふ者なり 凡夫の顛倒せるを爲て

實には在れども而も滅すと言ふ 常に我を見るを以ての故に

而も憍恣の心を生じ 放逸にして五欲に著し

惡道の中に墮ちなん 我常に衆生の

道を行じ道を行ぜざるを知つて 應に度す可き所に隨ひて

爲に種々の法を説く 毎に自らは是の念を作さく

何を以てか衆生をして 無上道に入り

速に佛身を成就することを得しめんと

譬へば勝れた智慧を持つて居る醫師が、自分の子供が毒に中てられて氣の狂つて居るのを癒してやらうと思つて、方便を以て暫く遠くへ旅行し、實際は生きて居るのだけれども、お前の父は死んだと言つて、子供に親を慕ふ心持を起させ、さうして薬を飲ませて、その薬が効いて子供の病氣が癒れば、また歸つて來て親子の對面をしたといふ、この場合に於て誰も父なる醫師を嘔吐きとは言へないであらう、子供を瞞したのだと言ふ者はないであらう。それと全く同じことで、佛はいろく

な方便を用ひて、いろ／＼に教を説かれるのであるが、それは結局一切の衆生を救はうといふ心持から出たのであつて、所謂眞實の心持から出たことである。『我も亦爲れ世の父』世の中の凡ての人間の父である、彼の醫師とその子との如きものである。この父であるといふ言葉は短かい言葉でありませけれども、世の中の人を悉く救ふべき立場にあるといふことです。佛が斯ういふ立場にあるといふのは、誰でもこゝに氣が付けば、必ず救はれるといふことです。併し氣が付かなければ仕様がな、前に申すやうに、低い程度の宗教に於ては、佛様とか神様とかに頼みに行つて初めて縁が出来るのだといつて居る。だから何かの註文を以て頼みに行く、頭が痛いから癒して下さい、金が儲からないから儲けさせて下さい、斯う言つて頼みに行く。頼まれたから向ふでも聞いて呉れるが、頼みに行かなければ何時まで経つても振向いても呉れない、斯ういふ風に思ふのが低い程度の宗教であります。併しながら高い方の信仰はさうではない。佛様は元來吾々と親子の仲だから、吾々の幸福になるやうに、吾々が本當の生活に入るやうにと、絶えず思つて居て下さる、頼みに行つて初めて氣が付いて救つて呉れるのではないので、頼みに行かないでも佛は何時でも吾々を救ふ積りでいらつしやる、たゞ吾々が氣が付かなければその事が判らない。例へば十五夜の晩でも、家の中に入つて居て外に出なければ、十五夜だか何だか判らない、外に出て仰いで天を見れば、月の光の美しさが判る、部屋の中に引込んで窓を閉め切つて居れば、十五夜でも闇の夜でも同じこと

です。小さき自己に執はれて、道も教も、求めない者は全くそれと同じことです。佛様は何時でも吾々を救ふ心持でいらつしやるのですが、それに氣が付かない者は救はれません。それは仕様がな、吾々の方から頼んで救はうと思はれるのではない、初めから救はうと思つて居られるのですが、それに氣が付かない者が多い、氣が付いて來ればその有難い恩を感じますから、それに依つて佛の大きな力と吾々の心との間に道路が開けるのです。佛は吾々の監督者ではない、また吾々に頼まれて初めて救つてやらうと思はれるのでもない、一切衆生と佛との間は親子の關係である、親は決して子を捨てはしない、だから子供がお父さんと言つて寄り纏つて行きさへすれば宜い。そこで我も亦爲れ世の父と言はれたので、これは前の譬諭品の所にも

今此の三界は、皆是れ我が有なり、其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり

といふ言葉がありました、こゝにまた同じ言葉が繰返されて居るのでありますが、父であるから救ふに決まつて居る、たゞ吾々がそれを自覺すれば宜い、さうすれば佛は諸の苦患を救ふ者であるから、人間の苦しみを皆佛が救つて下さることは疑ひがないのであります。

それで佛は何時も衆生の爲ばかり思つて居らるゝのであるから、常に衆生と共に居て、常に教へ導いてやりたいのだけれども、凡夫の心は顛倒して居るから、これを覺醒せしむる爲に、佛がこの世を去つて居なくなるといふことを知らしむることも必要なのである。若し何時でも佛に値へる

ものだと思ふと、佛の教などいふものは特別に有難いものでもないといふ氣になる。それで自然と『慍恣の心を生じ放逸にして五欲に著し』我儘な自分勝手な心持ばかり起して、眞心を以て道を求め教を求めるといふ心が無くなる。さうして放逸にして五欲に執著し、美しい色を見たいとか、好い聲を聞きたいとか、美味い物を食べたいとかいふやうな欲にのみ動かされて種々の罪を犯し、惡道に墮ちるであらう、惡道とは地獄とか、餓鬼とか、畜生とかいふものです。前にも言つた通り瞋りの念が心の中を占領した時には、地獄がそこに出現する、貪る心持が胸の中を占領した時には、そこに餓鬼道が出現するといふ譯で、我儘勝手な生活をして居れば、何時でも地獄や餓鬼や畜生の世界といふものはその人の生活の中に現はれて来る。それでは到底宜しくないから、佛は或る時期が來れば大勢の前から姿を消して、さうしてあゝ佛には値ひ難いといふ感じを起させ、随つて佛の教は輕々しくすることの出来ないものだといふことを心から思はせる、さうして佛の教に歸依するやうにさせるのであります。

佛様は何時でも衆生の道を行ずる者、道を行ぜざる者を知つて居る。詰り大勢の人間の程度がみな佛には判つて居て、或る者は道を行じ凡夫の生活を離れて尊い道に入り、後には佛の境界に到達しようと思つて居る、或る者は道を行ぜず、目前の事のみ執はれて、本當の道を歩いて行かうといふ心持を容易に起さない。それをみな佛は能く知つて居るから、『應に度すべき所に隨ひて、爲に

種々の法を説く』詰りその相手の力に應じていろ／＼な教を與へる。程度の低い者には低いやうに、高い者には高いやうに、それ／＼適當な教を説かれる。

佛の慈

併し佛様は、程度の高い教を説く場合でも、或は低い教を説く場合でも、何時の場合でもその教を説く時の心持は同じである。これは詰らない者だからいゝ加減な所で止めようといふやうな考へや、或はこれは惡人だから救はずに置かうといふやうな考へは持たない。説くには相手に應じて低い事を説いて居る時もあるけれども、さういふ時でもこの低い所からだん／＼深入りして行つて、結局は佛と同じになれるやうにしてやりたいと思つて居る、それが本當の慈悲であります。決して相手を馬鹿だといつて見限りはしない、惡人だといつて見放しはしない、みな佛と同じにしてやらうと思ふ、それは手間が掛る者と掛らない者がある、それはその人の程度、その人の性質に依つて違ふのだから仕方がないけれども、如何なる教を説く場合でも、その教を與へる佛の心持といふものは、どうかして衆生をして無上道、即ち佛の道に入つて、速かに佛身を成就することを得しめよう、佛と同じ境界に早く到達せしめたいと、斯う思つて教を説いて居る。だから佛の教といふものは、たとひ方便の、低い教であらうとも、その低い教の中に高い教に入るべき道がチャンと開かれて居る。斯ういふことをハッキリ知らなければならぬ、これが佛の教を與へらるゝに當つての根本の精神であります。極く低い教を與へながら、高い方に入れるやうな道を開いて置いてや

るといふことが、何時も考へられて居て、これが佛を知る爲に特に必要な事であります。

それでありますから吾々が經を讀んだり、佛教に關する書物を見たりする場合でも、或は佛に就ての話を聞く場合でも、さう思はなければならぬのであります。これは低い教だけでも、これを通して結局佛様が自ら信じていらつしやる所まで行けるのだと、斯う思つて教を學ぶことが必要である。決して吾々は自ら輕んじ、自分を悔つてはいけない譯であります。

以上で大體壽量品の説明を終りまして、次は分別功德品に入る譯であります。この分別功德品の前半までが所謂一品二半であります。それは次講で申し上げたいと思ひます。

第二百二講 妙法蓮華經分別功德品第十七(その一)

前回まで、壽量品を終りまして、今日はその後の分別功德品に入りますが、この分別功德品に入つて、「一切善根を具して、以て無上の心を助く」といふ所までが一品二半といつて、即ち壽量品を一品とし、壽量品に入る前の涌出品の後半を一半とし、これから讀む分別功德品の前半を一半とし、合せて一品二半とするといふことは前に申上げた通りであります。これは要するに佛の命の無量であるといふことを説き、また佛が世の中に出て教を説いたその目的を明らかにすることを説かれてあるので、昔からこれが法華經の中心であると謂はれて居ります。随つてこの一品二半が終ると共に、あとは流通分に入るのです。一體これはどの經典でもさうですが、凡ての經に於て序分、正宗分、流通分の三つの區別があるので、序分とは教を説く必要、教を説く當時の事情等を述べてある。法華經で申せば初めの序品がそれに當る。何故に斯ういふ教を説かなければならぬか、またその教を聞くのは凡そどんな人が聞くのか、聞く人の程度はどんなものかといふことが一通り明らかにされてあるのが序分であります。正宗分といふのは本論です。それが詰り方便品から、これから讀まうとする分別功德品の前半まで、詰り法華經そのもの、最も大切なる部分であります。所がこの本論が終つても一般の人はなかく迷ひが多い、それでこの教は一通り納得しても、これを

實行しようといふ奮發心がまだなか／＼起りにくい、そこでこの後に流通分といふのがあるので、流通分とは要するにこの教が實行さればどういふ結果を生ずるか、過去の事實に依つて證據立てるのであります。それであるからこれも輕々しく視る譯には行かないので、佛様を信ずるから説かれた所を實行しようといふ氣にはなるけれども、それにしても自分達は佛様とは大分距りがあるので、直ちにその佛の教を實行しようといふ勇氣が起りにくい、その爲に流通分の必要がある。これを實行すれば斯ういふ効果がある、こんな難かしい所でも正しい信仰を持てば通つて行けたとか、或は一家一族に於て親がシツカリして居れば、子供も感化を受ける、或は逆に子供の方がシツカリした信仰を持つて居た爲に、親がその感化を受ける場合もあるといふ例を擧げて、さうしてこの信仰を持ち續けることを勧める意味で流通分を説かれるのであります。それでこの分別功德品の後半から二十八品の普賢菩薩のことを説かれる所までが流通分であります。

今まで讀みました所で、佛様の世の中に出た目的を明らかにされ、即ち一切の人を佛様御自身と同じやうな者にしたい、佛と同じやうな廣大なる慈悲を具へた完全な者にしたいといふことを説かれました。詰り人は眼の前の所では善人も惡人もあり、智者も愚者もあるが、人間は生れながらにして佛性を具へない者はないし、實際初めは愚者であつても、修行の結果非常に勝れた人となつて世の中に感化を及ぼしたといふ實例もある。例へばお釋迦様の弟子の槃特といふ人は、殆んど自分

の名も覺えることが出来ないやうな頭の鈍い者であつたけれども、お釋迦様の慈悲に感激して、一心にお釋迦様を信じた結果として後には智慧もひらけ、槃特が大勢の前に立つて教を説いた時には、あれがどうしてあゝいふ教を説くやうになつたかと言つて、眼を見張つて驚いたといふことも傳へられて居る譯であります、そのやうな色々な事實や何かと思ひ合せて見ると、佛が世の中に出了たのは、一切の人を佛と同じにする目的であつたといふことが、決して言葉だけのことではない、事實に於て證據立てられて居るといふことも解るのであります。さういふやうに佛の世の中に御出現になつた趣意も判つたから、そこで大勢の者も非常に感激して、自分達も必ずこれを實行しようといふことを佛様の前でお誓ひ申したことがこれから後に出て居ります。

爾の時に大會、佛の壽命の劫數、長遠なることは是の如くなるを説きたまふを聞きて、無量無邊阿僧祇の衆生、大饒益を得つ。時に世尊、彌勒菩薩摩訶薩に告げたまはく、阿逸多、我是の如來の壽命長遠なるを説く時、六百八十萬億那由陀、恒河沙の衆生、無生法忍を得。復た千倍の菩薩摩訶薩有り、聞持陀羅尼門を得。復た一世界微塵數の菩薩摩訶薩有りて樂説無礙辯才を得。復た一世界微塵數の菩薩摩訶薩有りて、百千萬億、無

量の旋陀羅尼を得。

一九六二

その時に『大會』即ち靈鷲山ですが、其處に集まつて佛の教を聞いた人が、佛の命が無量であるといふことを伺つて、佛の命が無量といふことは、佛一人の命が無量ではない、一切の人間の命も無量なので、肉體は或る時期になれば役に立たなくなつても、人間の生命そのものは後まで續くのであるから、佛も無論無限の命を持つていらつしやるし、吾々も亦無限の命を持つて居る。さうしてその佛の教が長く滅びない以上は、吾々はこの世の五十年や六十年でその教を學び盡すことが出來ないでも、後の命の續きに於て更にこの教を學んで、さうして結局は佛様が仰しやつた通り、吾々も段々と迷ひを離れて佛様同様な智慧を具へ、慈悲心を具へるやうになり得るだらう、斯ういふことがシツカリ判つたから大變な喜びを感じたのであります。それで無量無邊阿僧祇といふ數限らない大勢の者がこの話を伺つて、大いなる饒益を得た、詰り心に喜びを感じ、また大いなる希望を持つたといふのであります。

そこで、阿逸多是彌勒の名であります、お釋迦様が、彌勒菩薩といふ人は慈悲の心持が深く、大勢の人に代つて様々な疑問を持出して佛の教を促して居るから、その彌勒に仰しやるには、阿逸多よ、斯ういふやうに如來の命が無量であるといふことが本當に判れば、六百八十萬億那由陀恒河

人生の變化に執はれぬこと

沙といふやうな非常に多くの者は、『無生法忍』を得ることが出来る。無生法忍とは詰り「無生死法忍」のことで死を略してあります。生死とは人生の變化だといふことは前にも屢々申上げた通りですが、無生死といへば人生の變化に執はれないことで、得意の境遇、失意の境遇、或は成功、失敗いろ／＼な事がある、それが皆人生の生死ですが、その生死に執はれず、人生の變化が如何様であつても、自分は自分として、信ずべき所を信じ守るべき所を守つて行かうといふ決心を、シツカリ固めることが無生死です。法とは状態、忍とは續くことであります。だから無生法忍といへば人生の變化に執はれない状態が永く續くといふ意味です。忍とは極く簡単に解釋すればしのぶ、我慢するといふ意味ですが、モット深入りすれば續くといふことであります。吾々も法華經など讀めば非常に感激して、自分達は凡夫であるが、折角縁があつて佛の教を學んだのであるから、何處までも信仰を續けたいといふ氣持は起さるけれども、それが續かない。いろ／＼な人生の出來事に出遇ふとツイ心が弛む、また世の中を見れば正しい行ひをして居て不幸な者もあれば、いゝ加減な生き方をして居て、可なり安樂な者もあるといふ事實を少し見せ付けられると尙更心が弛む。併し人間の命はこの世だけではない、永遠の命である、またこの世だけで信心を終らないで後までもその信心が續くといふことが本當に呑込めれば、無生法忍を得られるので、即ち人生の變化に執はれないといふ心持がズット後まで續くのであります。この世の六十年や七十年の一生で總勘定してしまは

ラと思ふから、ツイ信仰が續かない、それであるから本當にこのことが判れば無生法忍を得て、ナ
 一ニ眼の前の事に執はれるには及ばない、永遠の命を持つて永遠に修行して、結局佛と同じになる
 までは自分の努力を弛めまい、決して途中で後へ退ることはすまいといふシツカリした心持が持て
 ると申すのであります。

それから前に千倍する所の菩薩摩訶薩、所謂大乘の教を信じて居る者は「開持陀羅尼門を得」開と
 は教を聞くこと、持とは受持の略で、詰り信じて持つことです。先づ教を聞くことが第一の條件
 で、その教を受けるとは信ずること、その信ずる状態を持ち續けるといふことが第二の條件で
 す。もと／＼自分達は凡夫で迷ひだらけであるから、無論教を聞かなければ解る譯はないが、教を
 聞いても、それを信じなければならず、また信じてもその信ずる状態が永く續かなければ何の力に
 もならぬから、そこで教を聞いてそれを受持して信仰を續ける、その結果陀羅尼が得られる、陀羅
 尼とは譯して總持と申します。總持とは諸の善を持つて衆惡を除く力です。人間には佛性があるか
 ら何か善い心持は起る、併しそれが消えてしまつては何もならぬからその善を持つて失はないやう
 にして、これをだん／＼養つて大きくするといふことをしなければならぬ。また佛でない限り心に
 煩惱があるから、いろ／＼な悪い考へも起るが、その悪い考へを抑へてその力を増長させないやう
 にしなければいけない。その抑へて居る状態が永續して行けば惡は永遠になくなる、それで先づ善

を持ち惡を除くことをしなければならぬ、それが所謂總持であります。總持は自他兩方に亘らなけ
 ればいけない。自分も善を持ち惡を除くことに努めるし、また他人にも善を持ち惡を除かせるため
 に教を興へるやうに努めなければならぬので、何時でも陀羅尼と申せば自他兩方面であります。が、
 これも今申した佛の命が無限である、自分達の命もこの世だけではなく後まで續くといふことを知
 つた時に、初めてシツカリした斯ういふ覺悟が決する譯です。ですから永遠の命といふことを考へ
 ることが最も肝要だと申すのであります。

また一世界の全體を微塵に碎いたほどの數といふのだから、非常に大きい數でありませうが、そ
 の大きい數の菩薩摩訶薩、所謂大乘の修行をする者は『樂說無礙辯才を得』樂說無礙とは佛の教を
 説くことを喜びとする心持であります。これは何でもないやうだが實は難かしい事で、佛の教を世
 に弘める時に、誰も熱心にその教を聞き、またその教を信じて呉れ、ば何も文句はないけれども、
 熱心どころかまるで相手にしない者もある。相手にしないのはまだよい方で邪魔する者もある、或
 はさういふ教を弘める者に對して迫害を加へる者もある、人に親切な心持で教を興へても却つて敵
 とする者もある。さういふ場合でもこの教を弘めることがよいことだと思つて自分で本當に願つて
 樂んでこの教を説くといふやうになるまでには、非常な訓練を要することせう。さういふやうに
 教を説くことを喜びとするやうになつて初めて無礙辯才を得られる。たゞ言葉が巧みといふことで

はないのであつて何時でも教を弘める爲に自分の心の力、身の力を打込むのを喜びとする、寧ろそれに感謝するといふことになつて来て初めて無礙辯才で、どんな事情の下でも、どんな人間に對しても自由に教を説くことが出来るのであります。これも亦吾々の命が無限だといふことを信じてこそ本當に出来る譯であります。

無限の
感化力

またこの世界全體を微塵に碎いたほどの菩薩の中には『百千萬億無量の旋陀羅尼を得』旋陀羅尼の旋はめぐらすといふ意味で、めぐらすとは感化の力が他に及ぶことを申すのであります。自分が或る人を教へれば、その教へられた人がまたこれに感激して、この喜びを自分一人に私するに忍びないといふ所から他の者を教へる。だから一人を教へることは一人に止まらない、どれほど多くの人を教へるか判らない。それで一人自分が善を持ち悪を除く心持で、他の人に同じく善を持ち悪を除くことを教へれば、初めから大勢の人に教へないでも、それがまた他に及ぼすといふので、結局非常に多くの人を救ふことになる。さういふことを自覺して善を持ち悪を除くのが所謂旋陀羅尼であります。

幾度も申すことですが、吾々が佛教を信じて願を立てる時に四つあつて、その一番初めは『衆生無邊誓願度』といふことですが、自分一人で無邊の限りない大勢の人間を皆救はうといふことを誓願した所が、それは空想に終りはしないかといふ風に一寸常識で考へられるが今申したやうに、自

分がいさなり大勢の人を救はなくても、自分が説いたことを信ずる人がまたその信ずる所を他の人に傳へるだらうから、結局大勢の人間を救ふといふことになる、斯ういふやうに考へれば宜い譯であります。萬事がさういふ譯で、小さいとか大きいとか、多いとか少いかいふことに執はれる必要は少しもない譯です。一人を相手にしても、その一人を相手にすることは決して一人だけで終らない、その感化の及ぶ所はどれほど大きいか判らないのだから、さういふ覺悟で教を弘め、また自分も行ひを勵む、詰り感化の及ぶ所無限であるといふ自覺の下に善を勵むことが旋陀羅尼で、斯ういふ心持の者もだん／＼出來て來るといふのであります。

復た三千大千世界微塵數の菩薩摩訶薩有りて、能く不退の法輪を轉ず。
復た二千中國土微塵數の菩薩摩訶薩有りて、能く清淨の法輪を轉ず。復
た小千國土微塵數の菩薩摩訶薩有りて、八生に當に阿耨多羅三藐三菩提
を得べし。復た四天下微塵數の菩薩摩訶薩有りて、四生に當に阿耨多
羅三藐三菩提を得べし。復た三天下微塵數の菩薩摩訶薩有りて、三生
に當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。復た二四天下微塵數の菩薩摩訶薩

有りて、二生に當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。復た一四天下微塵數の菩薩摩訶薩有りて、一生に當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。復た八世界微塵數の衆生有りて、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發しつ。

それからまた、三千大千世界とは、屢々申すやうに、須彌山を中央として一つの世界といふことが考へられ、その世界を千集めたのが小千世界、その小千世界をまた千集めたのが中千世界、その中千世界をまた千集めたのが大千世界、詰り千の三乗したのを三千世界といふので、この三千世界全體に佛の教は必ず弘まるべきものだといふことを理想とする譯であります。だから三千大千世界といへば一つの佛の教の普く弘まるべき世界で、非常に廣大なる範圍でありませうが、その三千大千世界を微塵にしたほどの澤山の菩薩摩訶薩があつて、それが『不退の法輪を轉ず』法輪を轉ずるとは教を弘めることではありますが、その教を弘めるに當つて不退とは、どんな事情がどう起つて來ても勇氣を失はない、その努力を途中で弛めるといふこともないといふ、大變な決心、大變な勇氣を以て教を弘めるその力を得るといふのであります。

それから二千の中國土といへば今申した中千世界のことですが、それを微塵にしたほどの菩薩が『能く清淨の法輪を轉ず』無論教は清淨に違ひないので、教に淺いのも深いのもあるけれども、どんな教でも人の心の迷ひを除く爲に役に立たないものはないのであります。併し特に清淨の法輪と斷りましたのは、その教を説く人自身が己といふ心持を離れた時に、清淨の教を説くといふのであります。自分が人を教へるとか人を救ふとかいふ場合には、どうしても救ふ自分の方が救はれる者より勝れて居るのだ、或は教へる自分の方が教へられる者よりは勝れて居るのだといふ心持が起り易いので、さういふ心持が起ればそれは清淨ではない、やはり自己に執はれて居るので、それでは本當の佛様のお心持と一致しない、佛様はどんな人間を教へても、自分の方が勝れて居るなどいふ考へは微塵もない。教を聞いた者が救はれれば、その救はれたことのみを喜びとしていらつしやるので、本當に自他の區別を全く離れて居られる、それで初めて本當の清淨といふことがいへる。これは教を説くばかりではない、世の中で善い事をするのもその通りで、自分が善をなしてその善をなしたことに聊かなりとも誇りを感じる、得意を感じるといふ間はまだ、本當に清淨な心持とはいへない。本當に佛様のやうな廣い心持になれば、自他の別を忘れて教を興へることも出來、力を盡すことも出來るのですが、さういふ心持もやはり人間の命がこの世に限らないものだといふことが判つた時に初めて出來るのであります。

それから小千國土、即ち須彌山を中央として世界を千集めた程の世界を微塵に碎いた位な、殆ど數へきれないほどの菩薩摩訶薩が『八生に當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし』なか／＼この世だけ

では阿耨多羅三藐三菩提といつて佛の智慧を成就することは出来ない。生れ變り／＼して世の爲人の爲に力を盡して、八たびも命を續けて行く間にだん／＼と進歩して、結局は佛と同じ智慧を具へるやうになるだらうといふのであります。

また須彌山を中央とした四方の國を微塵に碎いたほどの多くの者が、これは前より一段徳の勝れた者であらうから、四たび生れ變つたその時に佛と同じ智慧を得るやうになるだらう。また須彌山の四方の國を三倍したものを微塵に碎いたほどの多くの者、これは前より数は少いが、数が少いことは、詰りその方が徳が勝れて居るといふことで、さういふ徳の勝れた人は、三たびも生れ變つたら佛と同じ智慧を具へるやうになるだらう。更に須彌山の四方の國を二倍或は一倍にしたものを微塵にしたほどの菩薩は、二度目或は一度目に生れ變つた時には佛と同じ智慧を具へるやうになるだらう。即ち次の世に於て佛と同じ智慧を成就することが出来るだらうといふのであります。

何れにしても、佛の本當の御趣意が解り、また佛の命が無限であり、自分達の命も無限であるといふことが本當に判つた時に於ては、決して眼前の世の中の利害損得といふものに執はれないで、また自分が今こゝで仕事をして、こゝで力を盡して、その効果を今收めようといふやうな、そんな眼先流の淺墓な考へがスツカリなくなるから、そこで信仰に深入りして斯ういふやうに世の中を感化することが出来るのであります。

以上地の根
境十の邊
境十の邊
境十の邊

それからこの世界を八倍したのを微塵に碎いた位な菩薩や何かは、またそんなに生れ變らないでも、それは非常に徳の高い菩薩であるから、お釋迦様をお助け申し、そればかりでなく、お釋迦様亡き後に於てもその教を本當に信じて、さうしてこれを弘めて居る間に自分もだん／＼智慧が勝れて、佛と同じ智慧を具へるやうになるだらうといふのであります。

斯ういふやうなことを仰せられて、佛の本當のお心持が解れば自分も救はれるし人も救はれる。併しながら自利は無論利他を生むのであり、自分が覺ることは他の人をも覺らせるといふ働きを生むのであります。他の人を教へよう、他の人を救はうといふ努力をして居る間に自分の智慧が愈々進み、自分の徳が愈々高くなるのでありますから、利他がまた自利を生むので、要するに自他といふことが一致する、斯ういふやうな意味からこゝの所を説かれて、教を與へるといふことは人の爲でも何でもない、人を救はうとして居る間に自分の迷ひがスツカリなくなり、人の爲に力を打込んで居る間に自分の徳が益々盛んになるのであるから、人の爲／＼といふことが自分の爲といふことになつて、結局自分が佛と同じやうな者にもなれる、斯ういふことが教へられて居るのであります。これは實に廣大なる教でありまして、人を救ふことが自分の爲であり、また自分の覺るといふことが人の爲であると思へば、自他の別を立てる必要も何もないのであるから、斯ういふ大きな心を持つてこの世に於ては自分出来るだけの事をして、さうしてこの世を捨てる時が來たならこの

世を捨て、次の命に於てまたその修行を続け、またその善根を積るといふ心持さへあれば、どんな場合に處した所が自分の信ずる所が變る譯はないのであります。斯ういふことをお釋迦様が説きになつたから、それで人間界の者は勿論天上界の者も非常に感動した譯でありませう。

佛是の諸の菩薩摩訶薩の大法力を得ることを説きたまふ時、虚空の中より曼陀羅華、摩訶曼陀羅華を雨して、以て無量百千萬億の寶樹下の師子座上の諸佛に散じ、并に七寶塔中の師子座上の釋迦牟尼佛及び久滅度の多寶如來に散じ、亦一切の諸の大菩薩及び四部の衆に散ず。又細抹の栴檀沈水香等を雨し、虚空の中に於て天鼓自ら鳴りて妙聲深遠なり。又千種の天衣を雨し諸の瓔珞、眞珠瓔珞、摩尼珠瓔珞、如意珠瓔珞を垂れて、九方に徧くせり。衆寶の香爐に無價の香を燒きて、自然に周く至りて大會に供養す。一一の佛の上に諸の菩薩有りて旛蓋を執持して次第に上りて梵天に至る是の諸の菩薩、妙なる音聲を以て無量の頌を歌ふて諸佛を讚歎したてまつる。

そこでお釋迦様が菩薩摩訶薩にこのことを説かれた時に、空中から『曼陀羅華、摩訶曼陀羅華』即ち大小の蓮の華が降つて、無量百千萬億といふ大勢の樹の下の師子座の上に居る佛様にふり掛つたといふのであります。師子座とは佛様が教を説く爲に坐つて居られる所を申すので、これは屢々申す通り、佛に感謝の意、若くは讚歎の意を表はした譯であります。それから寶塔の中には無論お釋迦様と多寶如來とお二人の佛様が並んでいらつしやるのですが、そのお釋迦様や多寶如來の上にもその華がふり掛つた。多寶如來といふ佛様はモウ久しい前からこの世を去られて教を説くといふことはなさらないのであるが、お釋迦様の教が眞實で絶対のものだといふことの證人に立つ爲にわざ／＼現はれて來られたといふことが前の寶塔品にあつて、教を説くといふことも非常に尊いけれども、その教が眞實であつて絶対のものだといふことを證據立てられるといふことも尊いので、どうも人間は疑ひの多いもので、どんなよい教を聞いても、その教を本當に魂を打込んで信ずるといふまでにはなかく／＼なりにくいけれども、今説かれた教は絶対のものだ、間違ひはないぞといふことを證據立てる者があれば、それなら本當に信じようといふ心持も起り易いのであります。だから教を説くことも尊いが、また教の眞實なることを證據立てることも尊いのであります。それからお釋迦様の教の眞實だといふことを證據立てる爲に方々の世界から佛が集まつて來られたといふことが前にもあるがこの方々から集まつた佛様も、自分達は何も説かないけれども、お釋迦様の教の絶

對だ、眞實だといふことの證人になつて、これを聞く人に心から信ずる心持を起させたのでありますから、これ亦非常に大きい功德を積んだ方と申すので、これ等の教を説いた佛様、證人となつた佛様、一切の佛様のお慈悲に感謝し、またその徳を讃える爲に天上界から華が降つたといふのであります。

それから一切の諸の大菩薩及び四部の衆、これは比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷のことでありませんが、それ等の上にも華がふつたといふことは、前にも一度同じやうなことがありましたが、現在佛と比べて非常に低い智慧を具へ、また非常に缺點の多い者であつても、修行を積んで行きさへすれば佛様と同じになるのであるから、その意味で大菩薩や四部の衆の上にも華がふつたといふことで現はして居るのであります。

斯ういふ思想はこの法華經ばかりではなく、一體大乘の經典の中に於ては始終出て來る思想であつて、華嚴經の中にも

心と佛と及び衆生と是の三差別無し

といふことが説かれてあります。心とは、こゝでは佛の教を學ぶ者の心といふ意味、詰り私共のことで、私共は甚だ不束ながら佛の教を學んで居るのでありますから、佛の教を學ぶ者の心のことであります。それから見れば佛様は非常に上の方にいらつしやつて、逆も及びも付かないほど尊い。

またこゝで衆生といふのは、佛様の教など何も知らない者、全く信心もしなければ教も何も知らない者、斯ういふ三段の者があるけれども、この三つは別だと思つてはいけない。何故ならば、今佛の教を學んで居る私共が一步步々と進んで行けば、結局佛様と同じになれるのだし、今吾々が佛の教を學んで居ても、心が弛んで信仰がなくなればだん／＼墮落してしまつて、結局何も佛の教など學ばない者と同じになつてしまふのですから、それで今學んで居る吾々の心も、本當に修行の結果佛とお成りになつた佛様も、また何も佛の教など知らない者もさう差別する必要はない。吾々も進めば佛に成るし、墮落すれば衆生になる、それで少しばかり自分が信仰が出來た、智慧が進んだからといつて誇るには及ばない、またなか／＼迷ひが多いからと言つてガツカリするにも當らない、斯ういふことを華嚴經の中にも言つてあるのであります。今こゝでもその意味が現はれて居るので、天上界から華がふつた時に、佛様の上にもふるし、教を聞いて居る者の上にもふるといふことで、今教を聞いて居る者も、聽ては佛と成り得る者であるから、これ亦非常に尊い者であるといふことを、華がどちらにもふつたといふことで表はして居る譯であります。

それから尙ほ細かになつた香が降つたといふこともある。これも印度の舊い習慣であつて、華を奉るとか香を焚くといふのはみな所謂供養で、歸依する、讚歎する、感謝するといふ心持を現はするのであります。それから虚空の中に於て鼓が鳴つたといふのも、やはり天上界、人間界の者が佛の

教に感謝するといふ心持を表はしたのであります。

天鼓と
毒鼓と

この鼓は大體二つの方面に區別されて居りまして、一つはこゝに謂ふ天鼓であり、一つは毒鼓であります。天鼓とは詰り信心をすゝめる方の意味を現はし、毒鼓とは惡を打破る意味を現はすので、これを合せて二鼓と申します。これは何時でも兩方なくてはならぬ。善をすゝめることも必要であるが、人間の心は迷ひが多いのですから、その迷ひを打破る爲に間違つた事をする者があれば、これに制裁を加へてさうして目を覺まさせなければならぬ、さういふやうに惡を懲す爲に制裁を與へる働きのことを毒鼓といふ言葉で現はして居ります。だから天鼓と毒鼓の二鼓合せて初めて本當の教が弘まるのであります。それでこゝは佛様が人間の命の無限なることを説いたといふよい方面でありますから、天上界から天鼓といふ、非常に平和な、愉快な音を出す鼓が鳴つたといふのですが、毒鼓は激しい音を出して、それを聞いた者は皆震え上るやうな音を出すといふのであります。佛教は慈悲を主にすると申しますが、本當に迷ひの多い者に對しては、これに對して非常に強い制裁を與へて、これに依つて目を覺まさせるといふより外はないので、これも亦慈悲の現はれである、斯ういふ風に謂はれて居ります。

それから澤山の天の衣を降らせたといふのですが、これもやはり歸依するとか、感激するとかいふ心持を現はします。それから瓔珞といふやうな飾が天から下つたとか、その他いろ／＼な寶を以

て作つた所の美しい飾が澤山下つたとかいふこともあるが、これも人間界、天上界すべての者が佛に歸依し、佛に感謝するといふ意味を現はすものであります。それから香爐の中に香がくべられて、その香が周圍に及んだといふのも皆同じことです。さうして『大會に供養す』とあるが大會といふことでスツカリを含んで居る。教をお説きになる佛様も尊いが、またその教を聞いて居る者も、その教を聞いたといふことが無駄になるものではないので、これが縁となつて大いに修行を積んで、他日教を世に弘め、大勢を救ふ所の働きが出来るのであるから、皆に對して天より華もふれば音楽なども聞えて來たといふのは、皆が大功德を積むのだといふ意味を現はすものであります。

それで一々の佛の上に諸の菩薩があつて、その菩薩が旛や天蓋を持つて次第に上つて行つて梵天まで繋がつたといふのですが、これは大變面白いことで、一體よいものは天から地にふるといふのが普通の考へです。天とは上の方のよい所で、地は下の穢れた所である、だから天から地にふるのが當り前であります。それで勝れた人が出た時には天からふつたといふ風に考へる、これは何處の國でも同じであります。所が大變面白いのは、こゝでは地の上にお釋迦様がいらしつて、其處で佛様が教を説いていらしつて、悉く地の上で大勢が教を聞いて居る、その地の上から始まつて逆に天の方へ向いて菩薩が列んで、それが皆美しい旛や天蓋を持つて居るといふのです。この思想が大乗佛教の思想として面白い、上からふつた教はいけない、詰り地面の底から苦しみ、惱んで、酷い

目に遭つて、その中から本當にこれではならぬといふ決心の者が出て来て、さうして教を學び、修行して覺り、その覺つた結果が天まで届くといふ思想であります。これは前の寶塔品で、寶塔が地の下から涌出したといふ所と同じ思想でありまして、本當によいものは地の底から出なければならぬ、上からふつたものはそんなに尊いものではない、苦しみ、悩みの中から生み出されて覺つたその結果といふものは實に大きなものであるといふ思想ですが、これが法華經全體を一貫した思想で、即ちこの吾々の住んで居る穢い娑婆世界を淨土にしようといふ、娑婆即寂光土の思想であります。この娑婆世界は苦しい世界であるけれども、この娑婆世界を離れないで、何も西や東の方に淨土を求めるといふことをしないで、此處で苦しんで、此處で惱んで、此處で修行して、此處で覺つて、此處に寂光土を實現しようといふ思想が法華經全體を一貫して居る思想で、それがこゝにも現はれて居るのであります。この地面の上から梵天に至るまでの諸の菩薩が、みな美しき旛や天蓋を持つて佛の徳の尊い事こと、また佛の教を修行をする者の尊いことを形に現はし、さうして妙なる音聲を以て諸佛を讚歎する、詰り佛の教といふものは實に尊いもので、この穢い土の中から天上界まで繋つて、穢い娑婆世界を離れて淨土にするといふ大きな働きをなさるといふので、讚歎の意を表するといふのであります。

更にこのことを偈を以て重ねて説かれることになるのであります。

第三百三講 妙法蓮華經分別功德品第十七 (その二)

この間は散文で書いた所を終り、今日は「爾の時に彌勒菩薩座より起つて」といふ所から偈に入る譯であります。

爾の時に彌勒菩薩座より起ちて、偏に右の肩を袒にして合掌し、佛に向ひたてまつりて偈を説きて言さく

佛希有の法を説きたまふ 昔より未だ曾て聞かざる所なり

世尊は大力に有して 壽命量る可からず

無數の諸の佛子 世尊の分別して

法利を得る者を説きたまふを聞きて 歡喜身に充徧す

或は不退の地に住し 或は陀羅尼を得

或は無礙の樂説 萬億の旋總持あり

或は大千界 微塵數の菩薩有りて

各々に皆能く 不退の法輪を轉ず

復た中千界 微塵數の菩薩有りて

各々に皆能く 清淨の法輪を轉ず

復た小千界 微塵數の菩薩有りて

餘り各八生在りて 當に佛道を成ずることを得べし

或は四三二 此の如き四天下

微塵數の菩薩有りて 數の生に隨ひて成佛せん

或は一四天下 微塵數の菩薩

餘り一生在ること有りて 當に一切智を得べし

是の如き等の衆生 佛壽の長遠なることを聞きて

無量無漏 清淨の果報を得

復た八世界 微塵數の菩薩有りて

佛の壽命を説きたまふと聞きて 皆無上の心を發しつ

世尊無量 不可思議の法を説きたまふに
多く饒益する所有ること 虚空の無邊なるが如し

その時に彌勒菩薩が座より起つて、右の肩を袒にして、詰りこれは眞心を現はす意味です。彌勒菩薩が自分の眞心を現はし、合掌して佛に向つて偈を説いて申すには『佛希有の法を説きたまふ』即ち昔より曾て聞いたことのない教を説かれた、これは前の壽量品のことを申すので、佛の命が無限であり、一切の人の命も無限である。また佛の教は永くこゝに遺つて一切の人を感化するといふこと、一切の人間はみな今直ぐ佛と同じ智慧を具へるやうにはならぬけれども、この命がこの世だけで終るのではないから、永い間にだん／＼修行を積んで、結局皆佛の境界に到達し得られるのだといふやうなことが根本から説かれたものであります。これに對して希有の法と申したのであります。斯ういふことは佛様は四十何年も教を説いて居られるけれども、今までこれ程突込んで徹底的に仰しやつたことはない。それで佛は大力にましまして壽命も限りがない、これも前に申したことを繰返してあります。また數限りない多くの佛子、即ち佛の教を聞いて、本當にこれを理解し得るやうな者は、この佛のお言葉が本當に解つて、成程さういふものであるか、自分達もその心持でこれから菩薩の行を永く續けて怠らなければ、將來に於て佛と同じに成れるのだといふことがスツカ

ッ呑込めたものでありますから、法の利を得られた、詰り教を學ぶといふことがどれほど大きな力であるかといふことがよく解つて、歡喜身に満ちて、佛のお弟子となつたといふことの喜びが眞に解つた譯であります。

それが解つたといつてもその人の力に依つて解り方も違ふし、また世の中に及ぼす所の働きも違ふ譯であります。中には『不退の地に住し』自分はこれから菩薩の行を積んで佛と同じに成るまでは力を弛めまいといふ、その決心が動かないで後戻りしないだけにはなつた。『或は陀羅尼を得』自分も善を積み惡を止める働きをするし、また他の人に對しても善を積ませ惡を止めさせる爲の教を興へるその力が具はつた譯であります。また『無礙の樂説』これは前に申したやうに、教を説くといふことに就て深き喜びを感じることでもあります。教を説くことは固より喜びに相違ないのであります。その教を説くことに對して迫害が來たり、様々な困難があります。その困難の中でも決して不愉快を感じたり、或は瞋りを起したりすることなく、教を説くそのことが決して無駄ではないのであるから、永久にその力が遺るのだといふことを信じて、喜んで教を説くといふやうな氣分になつた譯でありまして、さういふ人もだん／＼出來て來たといふのであります。

前の方で、大勢の菩薩がお釋迦様に向つて御慰勞の言葉を申上げたことがありました。この娑婆世界は随分機根の悪い者があり、佛も様々な迫害をお受けになるのであるから、お疲れになること

もあるでせう、斯う申上げた時にお釋迦様は、自分はそれは少しも心配しない、お前達から見ると大勢の者は大變教へにくいやうに思ふだらうけれども、自分の眼から見れば化度すべきこと易しで、教へた甲斐は必ずある、斯ういふことを仰しやつた。それで前にも度々申しましたが序でを以て申上げますと、この難易といふことは普通の使ひ方と少し違ふので、普通難とはむづかしいといふことであり、易はやさしいといふことであります。經典の中の難易の難は出來ないといふことで、易とは出來るといふ意味に解釋すれば宜いので、化度すべきこと易しとはキツト教へられるといふことで、何々すること難しとはなか／＼出來ない、斯ういふやうな意味に解釋しないと能く意味が判らないやうであります。例へばよく世間の問題になつて聞かれるのですが、念佛では阿彌陀様に頼つて極樂に往生することを期することを易行道といひ、經典などを讀んでいろ／＼研究することを難行道といつて居る。併し佛様を信じて往生極樂を期することはやさしくない。今のやうに複雑な世の中であると、他の事をスツカリ忘れて佛様のことだけ考へるといふことはどうしてもやさしいことではない、非常にむづかしいことで大概な者は出來ない、それを易行道と申すのは可笑しいではないか、斯ういふやうなことをいはれる。それは如何にも尤もであります。それはむづかしい、やさしいといふ意味ではなくて、難行道とは行ずることが出來ないといふ意味、易行道といふのは行ずることが出來るといふ意味で、出來るか出來ないかの問題であります。詰り難易といふこ

とは、佛様を信じて行けば、それは直ぐとは行かないけれどもキツト助かるので、それから自分一人で理窟ばかり言つて居ても、何時まで経つてもそれは助からないといふので、出来るか出来ないかの區別を立てる爲に難行道、易行道といふ言葉が使はれて居るのであります。こゝでも、お釋迦様が化度すべきこと易しと言つたのは、残らず教へることがやさしいといふ意味ではない、残らず教へて結局迷ひを離れしむることは出来るのだ、斯ういふ意味のやうであります。さういふやうに行く先にチャンと見越を付けていらつしやるから、佛様はどんな迫害にお遭ひになつても何ともないとふ心持であつたのであります。それでこゝの所謂樂説もその意味で、佛ほどでなくても、それだけ先の見える人であれば、何時でも教を説くことに喜びを以て説ける、それは骨が折れるけれども、併しその骨折りが無駄にならぬのだといふことが確かに判つて居るから、どんな困難の中でも喜びの心持を持つて通つて行くことが出来る譯であります、それはだん／＼佛の教を徹底的に伺つて、さういふ心持の者も出来たといふのであります。

また『萬億の旋總持あり』總持といふも陀羅尼といふも同じことだとはこの間申上げたが、旋とは一人の人に與へた教がめぐつて他の人にも及ぶといふことであります。一人の人を教へたら、その教へられた人が感激して、その喜びを私するに忍びず他の人に傳へるから、その教はグル／＼と廻つて大勢に及ぶ、さういふやうな心持で教を人に與へることを旋陀羅尼を得たと申すので、さういふ人もだん／＼大勢出来て來るといふのであります。

或は大千界を微塵に碎いたほどの大勢の菩薩があつて、それは『各々に皆能く不退の法輪を轉ず』法輪を轉ずとは教を説くことであります、その教を説くに當つて不退である、詰りあきないで、自分の説く教は今直ぐ効果がなくても、必ず大きな効果を現はすものだといふことを信じて居りますから、少しも倦むとか厭さるとかいふ心持なく、何處までも教を説くことに力を盡すといふ覺悟を持つのであります、斯ういふ人も澤山出来て來る。

また大千世界ほどでなく中千世界位を微塵に碎いたほどの菩薩達も、『各々にみな能く清淨の法輪を轉ず』清淨の法輪といふのは、詰り教を與へるそのことだけ考へる、その教を與へたことに對して報ひを欲しいなどといふことは無論考へないのですが、またその教を與へて居る自分の力が優れて居るとさへ考へない、たゞ教を與へることが喜びで、またその教を聞いた者がこれに依つて覺りを得れば、それをその人の爲に、また世の中の爲に非常に喜んでやるといふ位な心持で教を説く、これが清淨の法輪を轉ずるといふことで、そこまで行けば實に教へる人としては申分がないのであります、斯ういふ人も段々出来て來た。

或は小千世界といつて、中千世界よりもつと小さいけれども、その世界を微塵に碎いたほどの菩薩があつて、それはこれから八たびも生れ變つた時には佛道を成ずる、佛様と同じに成れる見込

みの付いた者もある。またそれよりも小さいこの世界の四倍、三倍、二倍位な世界を微塵に砕いたほどの菩薩があつて、さういふ者は『數の生に隨て成佛せん』詰り生れ變る數に伴つて佛と同じになれる、四倍の者は四たび、三倍の者は三たび生れ變つた時には佛と同じに成れるといふ者もある。それから一四天下といつて、須彌山の周圍にある四つの國だけを微塵に砕いたほどの數の菩薩達は、モウ一度生れ變つたら、その時は既に一切智を得る、即ち佛と同じ智慧を具へるやうな見込みの付く者もある。斯ういふ者は佛の命が無限であるといふことを聞いて非常に喜んで、益々勵んで教を説くことを努めるから清淨の果報を得る、少しも後へ戻るといふことなく、自分の智慧も多くなり、自分の徳も高くなつて、結局佛と一致するやうに成れる者である。

またこの世界を八つにしたのを微塵に砕いたほどの大勢の者も、佛の壽命を説かれることを聞いて『皆無上の心を發しつ』無上心とは即ち一切衆生を救はうといふ心持、一切衆生を救はうといふのは、言ひ換へれば、佛に成るまでは自分の修行を怠るまいといふ心持と同じであります、さういふ信仰を持つた者もある。

斯ういふやうに考へて見ると、佛が御自分の命は無量だといふことをお説きになり、また一切の人間も無限の命を持つて居て、結局佛と成るといふやうな、こんな不思議なこの上もない實に有難い教をお説きになつたのであるから、その饒益する所、これに依つて益を得る者は實に無限である

といふことは無論考へられる、それはチヨウド虚空の無限であるが如くであるといふのです。

これは單なる形容でなくて、方便品の中には

一切の衆をして我が如く等しくして異ること無からしむ

と申し、これがこの世の中に出て教を説く初めからの目的だと仰しやつてあります。一切の衆と申せば善人も惡人も、智者も愚者も、佛様を信ずる者信じない者もみな含む、詰り命のある者残らずで、その命のある者残らずを我が如く、即ち佛様御自身と少しも違はない者にしてやらうといふのが、佛様が世の中に出て教を説く目的だと仰せられた。これは實に大きな教でありまして、普通の人は、見込みのある者となない者との間にはツイ區別を立てたくなる、喜んで教を聞く者と不承々々教を聞く者とは同じに感じられないが、佛様はさうではなくて、一切の衆が、今眼の前の見込みのある者でもない者でも、佛教を信ずる者でも敵對する者でも、命のある者は然るべき時が來れば教を信じ、その教を勵んで行つて結局、佛様御自身と同じに成れる、さういふ見込みを持つて教を説くのである。それは教を説き始めた時から既にその心持であるといふことを打明けられて居りますが、こゝでもその意味で言つて居るのであります。空といふものは綺麗なものでも穢いものでも、高い山でも低い谷底でもみな掩ふのであるが、それと同じやうに、虚空のやうな一切を隔てない心持を以て教をお説きになつたといふこの功德は、實に尊いものであります。

天の曼陀羅 摩訶曼陀羅を雨して

釋梵恒沙の如く 無數の佛土より來れり

梅檀沈水を雨して 繽紛として亂れ墜つること

鳥の飛びて空より下るが如くにして 諸佛に供散し

天鼓虚空の中にして 自然に妙聲を出し

天衣千萬億 旋轉して來下し

衆寶の妙なる香爐に 無價の香を燒きて

自然に悉く周徧して 諸の世尊に供養す

其の大菩薩衆は 七寶の旛蓋

高妙にして萬億種なるを執りて 次第に梵天に至る

一一の諸佛の前に 寶幢勝幡を懸たり

亦千萬の偈を以つて 諸の如來を歌詠したてまつる

是の如き種々の事 昔より未だ曾て有らざる所なり

佛壽の無量なることを聞きて 一切皆歡喜す

佛の名十方に聞えて 廣く衆生を饒益したまふ

一切善根を具して 以て無上の心を助く

それでこの事に天地の間の凡てのものが感動したものですから、そこで『天の曼陀羅華、摩訶曼陀羅華を雨して』大小の白い蓮の花もふりますし、またいろ／＼な香などもふり、それが繽紛として墮ちて來て、佛様の上に降りかゝつた、即ち佛に對する凡ゆる命のあるものゝ感謝し感激する心持を現はしたものであります。その様子はチョウド鳥が空から飛び下りたやうである、鳥は輕い姿で少しも苦勞なしに空中から飛び下りるが、それと同じやうな有様であつた。これら佛に感謝する心持を現はすといふことが、實に感謝するその人自身の喜びであつて、本當に心から佛に感謝の意を現はすといふ様子が、その花や香のふつて來る様子にもよく現はれて居ると申すのであります。また天から樂器の音なども聞こえ、それが自然に周圍に響き、或は天から美しい着物などもふつて來た、その美しい着物はグル／＼廻りながら落ちて來た。廻りながらといふことは、此處も彼處も残らず、何處に居るものでも命のあるものはみな佛様の御恩を受けるのだといふことを形に現はした譯であります。それから香爐の中にはよい匂ひがするとか、それが周圍に及ぶといふことも、や

はり命のあるものが悉く佛に歸依するといふ心持を形に現はした譯であります。

また、これは散文の繰返しですが、佛様や菩薩達の居る所から空の一番上まで大勢の菩薩がズツト續いて、その續いて居る所の菩薩達が七寶で飾つた所の旛や天蓋のやうなものを持つて、皆佛の教に感謝するといふ心持を姿に現はして、その美しい姿が地上より天まで續いたとあります。これは前にも申したやうに、天からふつた菩薩ではないので、地からだん／＼上つて天まで續く、即ち佛教の理想はこゝにあるので、上から下へ降りて来るのではない、穢い土の上からだん／＼と天に達するのである。吾々は凡夫で迷ひだらけの心を持つて、この迷ひだらけの穢い土の中から出て、佛様と同様に、淨らかな天上界のやうな境遇に到達する。またこの土の上の煩はしいうるさい仕事をしながら、そのうるさい土の上の仕事の中から天のやうな淨らかな、光に満ちた將來を切開いて行く、實現して行くといふ力が生れる、斯ういふことがこゝに現はれて居るのであります。これは大乘の經典に於て始終現はれて居る思想でありますが、殊にこの法華經では屢々斯ういふことが示されて居つて、穢い所から綺麗な所へ行かなければならぬのだ、穢い土の中を通り抜けて天の淨らかな所に達するといふ積りでなければ本當の菩薩の行は出來ないといふことが屢々示されて居るのであります。さういふ菩薩達はみな佛のお徳を讃へて居る譯であります。それで美しい聲をあげて佛の徳を歌のやうにして讃へるといふのは、みながその積りになることを現はすので、自分達がこ

の娑婆世界に居つて穢い土の上でいろ／＼苦勞するといふことは尊いことだと思ふ、この自覺は何に依つて得られるかといへば、佛の教を伺つたことに依つて初めて得られるのでありますから、そこで地面から空まで續きながら、みな佛のお徳を賞讃するといふことになるのであります。斯ういふやうなことは昔から曾てないことであつて、佛の教が徹底して大勢の人にもよく判つて、それではみな佛の命が無限であるといふことを考へ、また自分達も無限の命があるといふことを考へるから、お互ひに心と同じうし、聲を同じうして佛のお徳を讃えたのであります。

斯ういふ譯で佛のお名前は十方の世界に滿ち亘つて、さうして廣く大勢の人を利益するのであります。まして、みな喜んで、その喜びの心持を分つ爲、また他の人を救ふ爲にも力を盡して、さうして『以て無上の心を助く』一切の人を救はうといふ心持をお互ひに持ち合つて、その心を一にして居るから、これに依つて懸てこの穢い土の上も淨土になるといふことは確かに判る譯であります。モウ少し先に神力品があつて、この娑婆世界と十方の世界と通じて一つになる、即ちこの穢い土の上に佛の住む淨土が實現される時が來るといふことを説かれて居るが、さういふ意味がこゝらにも段々見えて來て居ります。

先づこゝで法華經の中心とも謂はれる一品二半は一段落したのであります。今度は、これほど徹底的に教を實行することになれば、その實行した結果はどれほどの大きな効果を現はすかとい

ふ、所謂功德を得るといふ所に入るの、これから流通分に入る譯であります。この流通分には随分重複した所があるから、大事な所を讀んで、所々略して行きたいと思ひますが、斯ういふ譯で靈鷲山に於ける説法の中心とも謂ふべき教が濟んだものでありますから、そこで今度は改めて、お釋迦様が彌勒に、斯ういふ教を信じて行く功德がどんなに大きいものかといふことを言はれるのであります。この意味はだん／＼本文を讀んで行けば判りますが、聖徳太子が法華經と世の中のいろいろな教との關係を説かれた法華經義疏の中に

惣じて萬善を取つて、轉じて一因と爲す

と言つて居ります。萬善とは人間の毎日行ふ凡ゆる善い行ひ、その凡ゆる善い行ひは歸する所何になるかといふことを明らかにするのが即ち佛教だ、一つの因とは、これはこの娑婆世界を淨土にする本になるといふ意味、また個人々々からいへば、今自分は凡夫であるが、この凡夫を佛にするその本、斯ういつて宜しい譯であります。これを本當に教へる、親に孝行するとか、主人に忠義をするとか、友達同士助け合ふとか、人間としては様々しなければならぬ事があるが、それは結局何の爲かといふことを知らなければならぬが、結局は自分は凡夫であるが佛に成るといふことである。それから國全體からいへば、この穢い土の上の娑婆世界を淨土にするといふのが目的である。どんな小さい事をする時でも、その積りでやれ、また自分を佛にする本になる積りでやれ、これが本當

に徹底的に判りさへすれば、凡そ世の中に小さい仕事といふものもなければ詰らない仕事もない、みな價值がある、これを徹底的に心得させる爲に法華經といふものが説かれて居るのだといふことを聖徳太子が仰しやつて居るのであります。短かい言葉ですが非常によい言葉で、成程さう思はなければならぬ、吾々は凡夫であるから眼の前の事しか判らないが、本當に覺つた眼から御覽になれば、人間のする事に大きい小さいなどいさう彼此れ區別する必要もないので、どんな小さい事でも、それがこの穢い娑婆世界を淨土にする爲に役に立たない筈もなし、また凡夫である自分達を佛の境界に到達せしめる爲の役に立たぬ筈もないのでありますから、惣じて萬善を取つて、轉じて一因と爲すと思つてシツカリ捉へるといふことは非常に肝要なことであり、實際世の中が段々複雑になつて、人間の専門が分れて、使ふ人があり使はれる人があり、考へる人があり立つて働く人がありといふことになると、萬善がみな一因だといふことを本當に解らせるやうにするのが宜いと思ひます。併しこんな難かしい言葉ではいけないし、その解らせる形は非常に難かしいのであります。併し太子がこゝに眼を著けられ、また斯ういふ風に説明をしていらつしやるといふことは實に有難いことでありまして、全く大乘の佛教を御獎勵になるにはその御趣意であつたに相違ないのであります。だからその根本が解つて居れば、どんな事をするのでもその積りでやるから非常に大きい働きが出来る譯であり、また大きな功德が得られる譯でありまして、そのことをこれから

説かれるのであります。

爾の時に佛、彌勒菩薩摩訶薩に告げたまはく阿逸多、其れ衆生ありて、佛の壽命の長遠是の如くなるを聞きて乃至能く一念の信解を生ぜば、所得の功德限量有ること無けん。

若し善男子善女人有りて、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に、八十萬億那由佗劫に於て五波羅蜜を行ぜん。

檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毗梨耶波羅蜜、禪波羅蜜なり、般若波羅蜜を徐く。是の功德を以て前の功德に比ぶるに、百分千分百千萬億分にして其の一にも及ばず、乃至算數譬論も知ること能はざる所なり。若し善男子、是の如き功德有りて、阿耨多羅三藐三菩提に於て退すといは、是の處有ること無けん。

それで、彌勒菩薩にそのことを仰しやつて、阿逸多よ、大勢の者があつて、それが佛の壽命が無限のものであり、また自分達も無限の命があるといふことを聞いて、さうして『乃至能く一念の信

解を生ぜば』詰りこれを心に信じ、またその意味を理解して本當に解つたならばその功德は實に際限がない。本當に解つたといふことが凡ゆる善行を生み出すのだ、またさう解つて見ると、凡ゆる善行が己を佛にしろこの世を淨土にする原因になるのだ、その根本を知るといふことが實に肝要である。八十萬億那由佗といふ非常に長い歲月の間、五つの波羅蜜を行ずる者があるとする。これは前にも度々ありましたが、菩薩行は要するに六つあつて六波羅蜜、譯して六度と申します。その中の『般若波羅蜜を除く』即ち智慧を除いたあと『檀波羅蜜』以下五つ、布施、持戒、忍辱、精進、禪定を茲に擧げてあります。一々の説明は略しますが、その菩薩としての行を何故積むかといへば、それは六つの目の般若波羅蜜即ち智慧を成就するより外にない。人を救ふといふことも、また佛の戒を持つといふことも、瞋りを發しないやうな修行をするといふことも、詰りは心の迷ひをみな取除いて、佛と同じやうな廣大なる智慧を成就する爲の一つの方法に外ならぬのである。また本當に智慧が成就されば人に對する態度は布施となるし、また佛の戒に背くやうなことをする筈もなし、また智慧を成就して一切の人間の性質なり世の中の事がスツカリ解れば、瞋りを發する筈もなければ、途中で草臥れる筈もないから、それで六つの菩薩行の中の五つをみな揃へるといふことは、要するに智慧を成就するといふことの爲になるのであつて、また智慧を成就出來さへすれば、その五つの事を強いて實行しようと思はないでもみな實行出來るに相違ない、歸する所は一つである、

斯う思はなければならぬ。それにはどうも眼の前の二十年や三十年の修行でスツカリ出来上る筈はないのであるから、佛の命も無限であるし、自分達の命も無限であるといふことをよく考へて、さうして一步步々と堅實に修行の歩を進めて行くといふ決心がなければならぬ。けれども、この五つの波羅蜜を行ずる功德は、實に大きなものであるが『前の功德に比ぶるに』即ち佛といふものを本當に知つて、自分達も佛になるまで努力しようといふ決心したことに比べて見れば、千萬分の一にも及ばない位なもので、それは枝葉のことである。根本の心がシツカリ立つといふことが何しろ一番大事で、これが出来さへすれば何でも出来るので、その土臺の所謂佛と同じ智慧を具へるといふ決心をしたのに比べて見れば、他の善い事などは甚だ小さいことである。その比較はどの位かといへば『乃至算數譬論も知ること能はざる所なり』幾ら物を數へることが上手な人でも數へることの出来ない位まで差がある。それであるからどうしても佛のお心持を以て自分の心持とする、さうして長い命の間に本當に修行するといふ決心をするより外はない。それだけの決心が付いて途中でその修行を『退す』後戻りするといふことがあらうか、到底それはありはしない。だからこゝで皆も一つ土臺の覺悟を決めなければならぬ。斯う仰しやつて重ねて偈を説いて言はれるのであります。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく

若し人佛慧を求め 八十萬億

那由佗劫數に於て 五波羅蜜を行ぜん

是の諸の劫の中に於て 佛及び緣覺の弟子

并びに諸の菩薩衆に布施し供養せん 珍異の飲食

上服と臥具と 栴檀をもて精舎を立て

園林を以て莊嚴せる 是の如き等の布施

種々に皆微妙なる 此の諸の劫數を盡して

以て佛道に回向せん 若しは復た禁戒を持ちて

清淨にして缺漏無く 無上道の

諸佛の歎めたまふ所なるを求めん 若しは復た忍辱を行じて

調柔の地に住し 設ひ衆の惡來り加ふとも

其の心傾動せざらん 諸の有らゆる得法の者の

増上慢を懐ける 斯に輕しめ惱まされん
 是の如きをも亦能く忍ばん 若しは復た勤めて精進し
 志念常に堅固にして 無量億劫に於て
 一心に懈怠せざらん 又無數劫に於て
 空閑の處に住して 若しは坐し若しは經行し
 睡を除きて常に心を攝めん 是の因縁を以ての故に
 能く諸の禪定を生じ 八十億萬劫に
 安住して心亂れず 此の一心の福を持ちて
 無上道を願求し 我一切智を得て
 諸の禪定の際を盡さんと 是の人百千
 萬億の劫數の中に於て 此の諸の功德を行ずること
 上の所説の如くならん 善男女等有りて
 我が壽命を説くを聞きて 乃至一念も信ぜば

其の福彼に過ぎたらん 若し人悉く
 一切の諸の疑悔有ることなくして 深心に須臾も信ぜん
 其の福此の如くなることを爲 其れ諸の菩薩の
 無量劫に道を行ずる有りて 我が壽命を説くを聞きて
 是れ則ち能く信受せん 是の如き諸人等
 此の經典を頂受して 我未來に於て
 長壽にして衆生を度せんこと 今日の世尊の
 諸釋の中の王として 道場にて師子吼し
 法を説きたまふに畏るゝ所無きが如く 我等も未來世に
 一切に尊敬せられて 道場に坐せん時
 壽を説くこと亦是の如くならんと願せん 若し深心有らん者
 清淨にして質直に 多聞にして能く總持し
 義に隨ひて佛語を解せん 是の如き諸人等

此に於て疑ひ有ること無けん

若し人があつて佛と同じ智慧を具へたいといふことを求めて、八千萬億那由佗といふ非常に長い年月の間、世間の人をも救ひ、また佛様に對して御供養申上げたり、或は菩薩や佛の弟子に御供養する爲に、美味しい物とか、身に着る物とか、夜お休みになる物とかを上げたり、栴檀を以て家を建てたり、またその家の周囲には美しい庭を作つたりしていろ／＼な布施をし、また感謝の心持を現はすのは、結局何が本だといへば、それは佛道に回向する、自分もだん／＼智慧を具へて佛と同じに成りたいといふ積りで、この目的を達する爲にさういふ布施の行を積むのも、一つの修行の仕方であらう。これも結構である、併し歸する所は佛と同じ智慧を具へることになるのであるから、その根本の事が出来るのに比べれば、今の布施をするといふことはまだ小さい事である。或は又佛の戒を持つて少しも缺る所なく一舉一動を慎んで行くといふのも、結局佛と同じに成りたいといふ目的の爲であつて、その目的を外れないで戒を持つて行けば、それは佛様も洵に感心だと言つてお讚めになるに違ひない。また忍辱といふことを實行して、さうして何時でも瞋りを發せず、心が柔和でどんな場合でも人を許し、また人の善い所を認めてこれを勵ましてやるといふ心持で一切の人に接して、他所からどんな迫害が來ても自分の心が動揺しない、斯ういふことも洵に結構に相違ない。併しそれでもまだ／＼他所からいろ／＼な迫害が加はつて來る、その場合に於て、彼等も今は惡人であるけれども、後になればその惡を改めて、だん／＼と修行を積んで行けば、應て自分達と同じ心持になるだらうし、また自分達と同じ心持で修行して行けば、應て自分達と一緒に佛の境界に到達が出来るのだ、斯う思ひさへすれば、他所からの迫害に對して瞋りを發するといふことはないのである。さういふやうな心持で一切の人に接するといふことも、菩薩としては結構なことである。また今度は精進といふ心持で、心が堅固でどんな長い年月を経ても一心が少しも弛まない、斯ういふことも結構である。また時としては禪定と云つて、世の中を離れた静かな所に居つて、さうして心を練つたり、或は靜かに道を歩きながら心を練つたりして、さうして睡を除くといふのは必ずしも眠らない譯ではないが、何時でも心を専らに、心の動揺しないやうにし、その結果眞の禪定を得るといふやうにもなれる。これも結構であるが、要するにさういふことは歸する所は一つで、即ち佛と同じに成りたいといふことであるから、その功德は何處に統一せられるかといふことを能く知らなければならぬ。

それであるから以上の五波羅蜜のことはみな尊いけれども、今自分がこゝで言つたやうに、佛の命が無限であるといふこのことを本當に信じて、さうしてこの無限の命の中にシツカリ修行を積んで佛に成らうといふ決心さへあるならば、それが本當に以上の五つの點をも包容し尙ほ餘りある位な大きな結果を生ずるので、斯う考へなければならぬ。即ち佛に成らうといふのが根本だから、

その根本が解りさへすれば善い事はスツカリ出来る。若し人が悉く一切の疑ふ所がなくて、真心を持つて少しの間でも前の壽量品で説いたやうなことを信ずるならば、その信ずることの力といふものは今申すやうに非常に廣大なものである。鬼に角佛の命が無限だといふことを聞いてこれを信ずれば、必ずその信仰が續くので、その信仰が續けばこれが實行に現はれる。即ち佛様の壽命の無限だと説かれたのを聞いてたゞ理解するだけではない、それを正しく信受して、その信じたことを持ち續け、自分の身に行ふて行くならば、本當に佛と一致することが出来るのである。さうして今は佛とその教を聞いて居る人との間には區別があるけれども、だん／＼進んで行つて、お釋迦様が釋迦といふ一族の中から出て、修行を積んで佛と成つて一切の教を自在に説くことが出来たやうに、他の者もみな同じやうな智慧を具へ、さうしてお釋迦様が今説いて居らつしやると同じやうな態度で、同じやうな喜びを以て大勢の人に教を説くことが出来る。さうすると『法を説きたまふに畏る所なきが如くに』といふやうになる。畏るゝといふことは他の場合にもありましたが、俗語でいふ意味とは違つて、影響を受けないといふことであります。大勢がどんなに迫害を加へて來てもびくともしない、また大勢がどんなに集まつて讃めた所が、その爲に心を動かされないといふのが「無所畏」といふことであります。それだけの心持があつてこそ本當に教を説くといふことが出来るのであります。後に觀音様のことを説いた普門品がありますが、その普門品の中にも無畏を施すと

いふことがあつて、それが觀音様の働きだとあります。無畏を施すとは無畏になるやうな力を入に與へることです。この無畏を施すといふのも、たゞ畏ろしい所を超える力といふ意味ではないので、どんな境遇でも心を動かさぬやうな力を自から與へてやるといふことであります。何時でも無畏はさういふ意味に取れば宜しいので、佛様は無論無畏でいらつしやるが、吾々も修行を積んで怠らなければ、佛様と同じやうな無畏の心持で教を説くといふやうにもなれるのであります。それであるから佛様が一切の人に仰がれて居るやうに、そのお弟子達も斯ういふ心持で修行する者は、未來に於ては大勢の人に仰がれて、また今こゝでお釋迦様が無限の命などいふことをみなに説いて聞かせて居るが、他日はこの教を聞いて居る者もお釋迦様と同じく、また他の者に向つて佛の命は無限だ、人間の命も無限だといふやうなことを説くやうになるだらう。何と言つても此處までになるといふことは『深心』にある、心を本當に深く打込んで行つて、佛の教を自分のものにしてやうといふ熱心があつてこそ、そこまで行けるといふのであります。

さういふやうになつて行けば『清淨にして質直』である、清淨とは前から申すやうに、報ひを求めない心持、人の爲に力を盡すことが喜びであるから、決してそれに對して求めるといふやうなことがない。さういふ風に心も眞直ぐであつて、だん／＼佛の教を聞いてそれを皆自分のものにして、善を勵み惡を退けるといふことの努力をしたその結果がそこまで行けるのであるから、さういふ心

持で初めからだん／＼と修行を積んで行くならば、前から繰返して言つたやうに、皆が佛に成れるといふこの點に於て疑ふ所はないであらう。

それであるから今こゝで教を説いたのは、たゞ此處に居る人達の爲だけに説いたのではなくて、その教を聞いた人がその心持で菩薩行を積んで佛と一致するやうになれば、その人々が今自分がこの靈鷲山で教を説いて居るこの通りの心持、この通りの態度で他の者を教へるやうになるだらう。さうして皆が迷ひのない者になつた時に、この穢いと思つた娑婆世界が淨土に變るのであるから、淨土を西や東に求めるにも及ばぬので、此處に淨土が實現されるのである、斯ういふ心持で修行してこそ本當の修行といへるのである。斯うスツカリ打明けて仰しやつたので、大勢の人もこれに非常に感激したのであります。

併しこれは根本のことでありまして、内から外に向ふ關係と外から内に向ふ關係とがあることを忘れてはならない。根本を掴めば枝葉のことはどつちでも宜いといふことは一つの見方であるが、併し人間の修行の仕方を考へれば、枝葉の方をよくしてそして根本の方を纏めるといふことも大事である。他の例を申上げると、孔子は仁を求めて、心に仁がなければ禮は行はれないといふので、「人にして不仁ならば如何にせん」と言はれた。それは内から外に及んだのである。併しながら顔回に言はれた言葉は「非禮視ること勿れ」と言つて居る、それは外から内に及ぶ方である、だからやは

り両方から行かなければならぬ。心が仁ならば禮が行はれるといふのもよい教であり、禮を亂さないやうに禮を守つて行けば仁が全うせられるといふのもよい教であつて、本當に完全になるには内から外に及ぶ方の點と、外から内を全うする點と両方しなければならぬ。今こゝは内から外に及ぶ方を主に説いて、佛と同じ智慧を具へさへすれば何でも善いことが出来るぞ、斯う言つてあるが、今度先の方へ行くと寧ろ外の方から、眼で見るその見方が間違はないやうに、手一つの動かし方、足一つの踏出し方も道に適ふやうにして行けば心が淨らかになるといふ教に移ります。何時でも外から内に及ぶのだ、内から外に及ぶのだといふ両方が揃つて、初めて完全になるといふことは、これ等の點から見てもよく解ることだと思ひます。私共教育などの片端をやつて居る者は尙更よくさういふ所を氣を附けなければならぬと始終考へて居ります。今日は偈の所で終つて置きまして、あとは大切な所だけ讀んで行くやうにしたいと思ひます。

第四百四講

妙法蓮華經分別功德品第十七 (その三)

前回には、佛壽無量といふことが本當に解つてどれだけの決心が附くかといふやうなことを一通り述べましたが、今日は尙ほそれに續いて、その教を弘めるのには末の世に至つて何を主にしたら宜いかといふ問題に入つて行くのであります。

又阿逸多、若し佛の壽命の長遠なることを聞きて、其の言趣を解するのと有らん。是の人の所得の功德、限量有ること無くして、能く如來の無上の慧を起さん。何に況んや廣く是の經を聞き、若しは人をしても聞きしめ、若しは自らも持ち、若しは人をしても持たしめ、若しは自らも書き、若しは人をしても書かしめ、若しは華香瓔珞、幢旛繒蓋、香油蘇燈を以て經卷に供養せんをや。是の人の功德無量無邊にして、能く一切種智を生ぜん。

またお釋迦様が彌勒に申すには、佛の命も無限であるし、また一切の人の命も無限であるから、

一たびこの菩薩行を勵まうといふ心持があれば、この世だけを頼みにしないで、長い間にだん／＼と修行を重ねて、遂には佛様と同じ境界に行けるのだといふことが本當に掴まるのであるから、さういふことが本當に掴まつた人の行ひは、何處までも進んで行つて、結局は『如來の無上の慧』佛様と同じやうな智慧を具へるやうにもなるであらう。それであるから一人の人でもそれは非常な働きを將來する譯である。況して、一人の人が斯ういふことを本當に覺つて、而もその働きは非常に大きいのでありますから、また他の人を誘ふて一緒に、この命は無限であるといふこと、また佛と成るまでは修行を怠るまいといふやうなことを聞かせて、自分も、これをたゞ聞いただけでなくよく信じ、他の人にも信ぜしめ、また自分でも書き人にも書かせ、更に華、香、瓔珞、幢旛、繒蓋、香油、蘇燈といふやうな様々なものを列べてこの經を供養するならば、こゝは佛にとなく經に供養するとあります。何故ならば、佛は時が來ればこの世を去られるのでありますが、佛の教は經の中に籠つて居て、佛様の全身が經の中に生きていらつしやるといふのでありますから、教が一切の人を救ふ力を持つて居る、その教の恩に感謝の意を現はす爲に、こゝに列べてあるやうな物を經に供養するといふのであります。無論それだけの心持がありさへすれば、たゞさういふ物を以て供養するだけでなく、自分が信ずる所を必ず人に説いて、大勢の人にも同じ信仰をすゝめるといふ働きをするのは申すまでもないのであります。だから『この人の功德無量無邊にして、一切種智を生ぜ

ん」結局は佛様と同じやうな智慧を具へるまでになるであらう、斯ういふ心持で信心をしなければならぬ譯であります。

阿逸多、若し善男子善女人、我が壽命の長遠なるを説くを聞きて、深心に信解せば、則ち爲れ佛常に耆闍崛山に在して、大菩薩諸の聲聞衆の圍繞せると共に説法するを見ん。又此の娑婆世界、其の地瑠璃にして、坦然平正に、閻浮檀金以て八道を界ひ、寶樹行列して、諸臺樓觀皆悉く寶をもて成じて、其の菩薩衆咸く其の中に處するを見ん。若し能く是の如く觀ずること有らん者は、當に知るべし是を深信解の相と爲く。又復た如來の滅後に、若し是の經を聞きて毀訾せずして隨喜の心を起さん。當に知るべし、已に深信解の相と爲く。何に況んや之を讀誦し受持せん者をや、斯の人は則ち爲れ如來を頂戴したてまつるなり。

肉身の佛は八十歳を以てこの世を去つてしまつて姿は見えなくなるけれども、併しそれは吾々の眼の前に見えな一つの變化であつて、佛様そのもの、命は無限である。だから佛の壽命の長遠なる

ことを説くのを伺つて、眞心を以て念ずる者があれば、何時でも佛様は耆闍崛山、即ちこの靈鷲山にゐらして、大勢の菩薩や聲聞達に圍まれて、永久に其處を離れないで教をお説きになつてゐると思へるであらう。斯様な心持で經典を讀めば、今でも眼の前にチャンと佛様がいらして教を説いて居られるのを親しく伺ふと同じやうな心持になれるであります。佛といふもの、長い命は何時まで經つても盡きないといふことになる譯であります。

また今眼の前に見えて居るこの娑婆世界は苦しい穢い所で、様々な見苦しいものもあるけれども、皆の心持が佛様のやうになつてしまへば、淨土を他に求めないでも此處に淨土が實現されるのである。眼に見える周囲の景色などは何でもない、その穢い景色を見ながら此處が淨土になるのだと思つた時に、其處は土がみな瑠璃であつて、坦然として平らかで、閻浮檀金といふやうな黄金の繩を以て周圍に境をし、さうして樹はみな寶が花ともなり實ともなつて居り、其處は美しい建物もあるし、その建物も寶を以て飾つてある。さうして菩薩がみなその中に居つて樂んで居るやうな様子で、此處に淨土が實現されるのだといふことが、確かに信ぜられるやうになるのであります。

斯ういふやうな心持を持つて居る者が即ち深き信解の相といふのである。こゝまで考へ及べばその信仰が後へ戻るといふことはないのでありますから深き信解の相です。佛教が普く世界に弘まつ

て、凡ての人がこれに歸依した時の様子が眼の前に見えて居るのでありますから、目標がチャンと決まつて居る。さうすればこの教を弘めるのにどんなに骨が折れても、どういふ邪魔があつても、そんなものは物の數ではないといふ勇氣も起り、決心も出来る譯でありますから、これは深き信解の相と申さなければならぬのであります。

また如來の滅後即ちお釋迦様がいらつしやらなくなつて後にこの法華經に説かれてあることを聞いて、これを毀譽せず、勿論尊い教でありますからこれを誘ふといふ筈はないのでありますけれども、動もすれば、これは非常に尊い教であるけれどもなか／＼自分達には實行出来ない、世の中が非常に複雑になれば幾らよい教でもさういふ教は行はれなくなるだらうといふやうな疑ひを起す者も随分ある。現に今日凡ての教は役に立たぬ、たゞ淨土に往生することを期さなければならぬといふやうな説も随分起つて居りますが、さういふやうな考へから見れば、法華經の如きは經としては立派な經であるが役に立たなくなる、斯うも思へるが、さういふ心持を起さぬやうにしなければならぬ。さうして隨喜の心持を起して、自分達の心の持ち方一つで佛様の仰しやることが此の娑婆でだん／＼實現されて來るのである、この娑婆世界が淨土になるのだといふ確信を持つ者がありますれば、その人は深き信解を得て居る、それが本當に佛のお心持を自分のものにした者と申すべきである。これはその心持一つでも非常に尊いのですが、況してやたゞさう思ふだけでなく、これを讀

誦、繰返し／＼讀んで、一層佛様のお心持が自分の心持に一致するやうに、自分の心の奥底にしみ渡るまで修行を積んで、さうして長くその信仰を續けるといふやうな人があるならば、それは申分のない人で、この人は『則ち爲れ如來を頂戴したてまつるなり』佛様を自分の頭の如く戴いて居るのだと申しても宜しい。

この如來を頂戴したてまつるなりといふ言葉は、チヨウド頭に佛様が宿つていらつしやるといふやうな意味でありまして、その意味で日蓮上人は、

日蓮が頭には大覺世尊かはらせ給ふ

と申されて居ります。自分のこの頭には佛様がいらつしやるのだ、だから自分は詰らぬ者であるけれども、法華經を深く信じて居るから、この信に依つて佛様が頭に宿つていらつしやる。随つて自分の言ふことは決して間違ひがない、國の將來の事までも見透して居るのだといふことを申して居ります。これは全く斯ういふやうな佛様が頭に宿つて居られるといふ經文に基いてシツカリ固められた信仰であらうと思はれるのであります。仙臺のお家騒動のありました時に、芝居では政岡となつて居る三澤初子が命懸けで若殿を護つて、あのお家騒動の中を無事に通り抜けることが出來たのであります、あの三澤初子は非常に日蓮宗の熱心な信者であつたものですから、この「日蓮が頭には大覺世尊かはらせ給ふ」といふ言葉を思ひ出して、それで白檀で拵へたお釋迦様の二寸位の像

を髪の中に結び込めて居つた、それでいろ／＼邪魔があつたり、或は命を脅かされるやうな時には自分の頭には佛様が宿つて居られるのだ、この佛様に對して未練なことをしては濟まないと言つて自分を勵ましたといふのですが、その像が今でも仙臺の初子の菩提寺に遺つて居ります。それを私も一度見せて貰ひましたが、白檀の像ですが終始頭の中に入れて居たので、油がしみて眞黒になつて居りました。さういふやうな事蹟を思ひ合せますと、本當に自分の頭に佛様が宿つて居られるといふこの確信の力は、實に大きいものだといふことが考へられます。それで信仰が篤くなれば無論佛様が宿つていらつしやるといふことも自ら信じられるやうになり、佛様が宿つていらつしやると思へばまたそれに依つて勵まされて、一層シツカリした菩薩行も出來て、要するにこの一念の力といふものは非常に大きいものであるといふことは考へられる譯であります。

阿逸多、是の善男子善女人は、我が爲に復た塔寺を起て、及び僧房を作り、四事を以て衆僧を供養することを須るず。所以は何ん、是の善男子善女人の是の經典を受持し讀誦せん者は、爲れ已に塔を起て、僧房を造立し、衆僧を供養するなり。則ち爲れ佛舍利を以て七寶の塔を起て、高廣漸小にして梵天に至り、諸の旛蓋及び衆の寶鈴を懸け、華香瓔珞、抹

香塗香燒香、衆鼓伎樂、簫笛箏篳種々の舞戲ありて、妙なる音聲を以て歌頌讚頌するなり。則ち爲れ已に無量千萬億劫に於て、是の供養を作し已るなり。

さういふやうにこの教をシツカリと信ずる人は實に頼もしい人で、その人一人でなく、その感化が周圍中に及んで、この娑婆世界が淨土になる助けをなす者でありますから、そこで更にお釋迦様が彌勒に申すには、自分がこの教を信じてこれを實行して居れば、これが何より佛の恩に報ゆる道であるから、それ以外のことは何もしないで宜しい。佛の恩を記念する爲に寺を建て塔を建てるといふことが一般に行はれて居るが、さういふことをしないで宜しい。また僧坊を造つて佛の教を弘める人の爲に住ひを造つて、さうして四事と申すのは、食物、着物、住ひ、病氣の時の薬といふやうなものでありますが、その四つが主な供養だといはれるけれども、その四つの供養をするにも及ばない、自分が教を信じてそれを實行さへすればモウそれで申分がないのであつて、それは本當の佛の教の命を持續けることであるから、それで十分だと申さなければならぬ。何故ならば、善男子善女人はこの經典を受持し讀誦して居るのであるから、塔を建てないでも建てたと同じことであり、僧坊を造らないでも造つたと同じことであり、また大勢の僧を供養しないでも供養したと同

じことである。先づ一般の信者のやり方といへば、佛の遺骨を埋めて、其處に七寶で飾つた塔を建て、その塔は下の方は廣くて段々上の方が小さくなつて天上まで届くやうな立派な塔を建て、其處に旛や天蓋をかけ、それから美しい鈴をかけ、花や、香を供へ、香の中にも抹香とか塗香とか、焼香とか、様々な香を供へる。それから衆鼓、伎樂、簫笛、篳篥といふやうな凡ゆる樂器を集めて音樂を奏し舞をまひ、實に微妙なる所の音樂を以て佛をお讃め申すといふのが最も手厚い供養の道であります。この法華經を信じて實行さへすれば、今申した如き供養をしたと同じことである。またこれは既に無量千萬億劫に於てこれだけの供養を果した者といへるのである。斯ういはれて居ります。

これは前の方便品の中の、自分の遺骨を埋めて塔を建てるには及ばぬぞと言はれたその趣意を繰返されて居るのであります。無論人情としては、佛の恩を感謝する心持があれば、幾ら自分のことは構はず捨て、置けと言はれても構はずに置けるものではないから、或は塔を建てたり、寺を建てたりするといふことにもなりません。また佛でなくても、誰でも自分が或る人に恩を感じますれば、その記念の爲にいろ／＼な塔を建てるとか、それほどなくても、何か記念すべきものを建てるといふこともありませう。これは人情ですからそれが悪いといふのではない。併しながら本當に佛様のち心持を察しますと、そこに輕重があるといふことだけは考へなければならぬ。教を實行し

弘めるのが重くて、さういふ建物は寧ろ輕い、斯うなるのでありますから、寺や塔を建て、置きながら信心しなければ、これは佛の思召とは逆になるといふことは言へる譯であります。私共始終佛敎の方の人々などに會ふのでよくそんなことを話合ふのであります。寺が要らないとは思はない、またいろ／＼な儀式も尊いと思ふ、併しながら佛様御自身は要らぬと仰しやる、要らぬと仰しやるのはそれよりも教を信じて實行する方がモット功德が多いといふ御趣意であるから、決して寺は要らぬとは言はぬけれども、寺を建てながら信心が足りなかつたら、それは佛様の御趣意とは逆になる。また儀式は要らぬとは思はないが、儀式をしながら上の空で儀式をして居たら、それは佛様の御趣意と逆になるのであるから、その重いと輕いと區別を本當にシツカリ立てなければならぬといふことをよく話合ふのであります。

佛様御自身からいへば、自分のことなどは考へて呉れなくても宜しい、自分の遺した敎が行はればそれで宜い、斯う仰しやるのであります。それは佛様の立場であつて、信ずる者の立場とすれば、この御恩を記念せずには居られないといふのも人情であります。たゞその間に只今申上げたやうに輕重を立て、何と言つても教を信じまたこれを實行するのが本だといふことを忘れないやうにしなければならぬ譯であります。

阿逸多、若し我が滅後に、是の經典を聞きて能く受持し、若しは自らも書き、若しは人をしても書かしむること有らんは、則ち是れ僧房を起立し、赤梅檀を以て諸の殿堂を作ること三十有二、高さ八多羅樹、高廣嚴好にして百千の比丘其の中に於て止み、園林浴池、經行禪窟、衣服飲食、牀蓐湯藥、一切の樂具、其の中に充滿せん。是の如き僧房、堂閣若干、百千萬億にして、其の數無量なる。此を以て現前に我及び比丘僧に供養するなり。是の故に我説く、如來の滅後に若し受持し讀誦し、佗人の爲に説き、若しは自らも書き、若しは人をしても書かしめ、經卷を供養すること有らば、復た塔寺を起て、及び僧房を造り、衆僧を供養することを須るず。況んや復た人ありて能く是の經を持ち、兼て布施、持戒、忍辱、精進、一心、智慧を行ぜんをや。其の徳最勝にして無量無邊ならん。譬へば虚空の東西南北四維上下、無量無邊なるが如く、是の人の功德も亦復た是の如し。無量無邊にして、疾く一切種智に至らん。若し人

是の經を讀誦し受持し、佗人の爲に説き、若しは自らも書き、若しは人をしても書かしめ、復た能く塔を起て、及び僧房を造り、聲聞の衆僧を供養し讚歎し、亦百千萬億の讚歎の法を以て菩薩の功德を讚歎し、又佗人の爲に種々の因縁をもて、義に隨ひて此の法華經を解説し、復た能く清淨に戒を持ち、柔和の者と共に同止し、忍辱にして瞋無く、志念堅固にして常に坐禪を貴び、諸の深定を得、精進勇猛にして諸の善法を攝し、利根智慧にして善く問難を答へん。

そこでまた同じやうなことを重ねて彌勒に申すには、我が滅後、即ち末法の世になつてこの經典を聞いてよく受持し、またたゞこれを信するだけでなく、自ら書くとか、人に書かせるとかして、他の者をすゝめて同じ信仰に入れる者があれば、その者は坊さんの住む家を建てなくても建てたと同じである。而もその僧坊を建てるには赤梅檀といふやうな非常によい樹を選んでそれで殿堂を建て、その殿堂も澤山あつて、高さも八多羅樹といつて非常に高い殿堂で「高廣嚴好にして」、廣大な美しい殿堂で、そこに百千の比丘が暮せるやうなそんな立派な建物を建て、周圍中には庭もあり、

また身を淨める池もあり、みんなが歩く所の道もあり、靜かに坐つて心を練る部屋もある。またそこに住んで居る者の衣服、飲食、牀蓐、湯藥、その他音楽を奏するものなどが一ぱいあつて、その僧坊や堂閣が一つや二つではない、百千萬億にしてその數は無量であるが、それほどのものを整へて現前にお釈迦様やその弟子の坊さん達に供養したその功德よりも、前に述べたやうに、末法の世に眞實の佛の教を自ら信じ、さうして更に人にもその信をすゝめれば、これほどの功德はないので、敢て立派な塔寺の建立をする必要はない。

それであるから自分は更めて言ふが、如來の滅後にこの經典を受持し讀誦し、また人の爲にも説き自らも書き、人をして書かしめ、さうして經卷を供養する、即ちこの教を大事に思つて、こんな尊い教だからどうしてもこれは長く後の世の中に行はれるやうに命に懸けてもこの教を護らうといふ心持であるならば、それで十分で、塔寺を建てたり、僧坊を造つたりして坊さん達を供養するには及ばない、たゞ自ら信ずるといふことが一番大事だと思はなければならぬ。況して人あつて能くこの經を持つて、さうして布施をして世の中の憐れな者を救つてやるといふことをしたり、佛の戒を持つたり、忍辱といつて、一切の人がどういふ事しても瞋りを發しないといふ修行もし、また大いに精進し、一心といふのは禪定と普通言つて居ると同じことでありまして、心を亂さずシツカリ鎮めること、さうして智慧を磨いて行くといふこの菩薩行、所謂これは六度であります、そ

れを合せ實行して行くといふことであるならば、その徳は最勝であつて、モウ世間に比ぶべきものはない、無量無邊と言つて宜しいのである。また實際法華經を信じて佛様と同じ心持になれば、世の中の憐れな者を救はずに置けと言はれても救はずに居られない。また人がどんな亂暴な事をして、そんな者に對して瞋りを發するといふことはないのでありますから、信仰が本當に一つに纏まつて居れば、こゝに擧げられた菩薩行は自然に出来るに相違ないのであります。

そこでさういふやうに信仰の心持が一々の行ひに現はれて、日々の一舉一動悉くがこの菩薩の行として人の手本となるといふ所まで行けば、チヨウド大空が東西南北、四維上下無量無邊で際限がないが、その空の際限がないと同じやうに、この信仰を持つて世の中に立つて人をすゝめて行くといふその功德は、實に際限がない、その人の功德も亦無量無邊であつて、さうしてこの行ひを段々と續けて參るならば『疾く一切種智に至らん』とあります。この疾くとは、幾度も申すやうに早くといふ意味ではなくて、他の道を通らないでといふ意味であります。このことさへして行けばそれ一つで以て一切種智といつて、佛と同じ智慧を具へるやうになるであらうといふのであります。

何と言つても自分がこの教を信じて心に喜びを感じますならば、人にすゝめるといふことに自然になるのである。だからこの經を讀誦し受持すれば、他人の爲に説くといふことになるのは自然であります。それから自分でこの經を書くといふのも一つの修行であります、その修行をすればま

た他の者にもすゝめたいといふ心持になるのでありますから、他の人にも書かshめて、その上に尙ほ餘力があつて塔を建て、僧坊を造るといふことをするならば、これに越したことはない譯であります。

そこで『聲聞の衆僧を供養し讚歎し』即ち淨らかな行ひをして居る僧侶なども保護してやればこの上のことはない。さうしているくゝな讚歎の言葉を以て菩薩の功徳を讚歎するといふことも尊いことである。詰り菩薩行を積んで行くのが尊いと申すのは、世間にさういふ善い行ひをすゝめることになる、大勢の人間にみなそれと同じ信仰に入る力を與へるのでありますから、これは非常に尊いことでもあります。また『他人の爲に種々の因縁を以て義に随つてこの法華經を解説し』といふことも大切な事でもあります。因縁とは事實でありますが、なかゝ初めから法華經の中に説かれたやうな斯ういふ奥深いことを理論だけで説いても人は納得しないのでありますから、この信仰を持つた人が斯ういふ立派な行ひをした、世の中の爲にこれだけの働きをしたといふやうないろゝな事實を擧げて、これを證據として義に随つて説く、義に随ふとは佛様のお心持を違へないやうに、本當に正しくこの法華經を世の中の人に説いてその信仰を促し、また『清淨に戒を持ち』自分が毎日の行ひに於て少しも過ちのないやうに努める。さうして『柔和の者と共に同止し』自分が毎日てた者で、我を捨てたゞ佛のお心持の世の中によく解るやうにとのみ考へて居る者、これが本當

に柔和な者であります。さういふ者と一緒に居つて、さうして『忍辱にして瞋りなく、志念堅固にして常に坐禪を貴び』自分の心の亂れをさめるといふことに専ら力を用ひて、さうして『諸の深定を得』詰り深き禪定を得て心が少しも亂れないで『精進勇猛にして諸の善法を攝し』即ち自分のものと自得して、さうして智慧が勝れて居つて、人がどういふことを尋ねて來てもそれに自由に答へられる、斯うなればこれは最上の者であります。併し根本は信ずるといふことでもありますから、佛の教をよく理解して信じて、さうして段々その信が長じて來た結果として、こゝに數へられたやうなことも出來て來る譯であります。本は信で、心の持ち方一つであるといふことを忘れないやうにすべきものであります。

阿逸多、若し我が滅後に諸の善男子善女人、是の經典を受持し讀誦せん者、復た是の如き諸の善功徳有らん。當に知るべし、是の人は已に道場に趣き、阿耨多羅三藐三菩提に近きて、道樹の下に坐せるなり。阿逸多是の善男子善女人の若しは坐し若しは立ち、若しは經行せん處、此の中には便ち應に塔を起つべし。一切の天人皆應に供養すること、佛の塔の如くすべしと。

また更に彌勒に言はれるには、若し自分の滅後に於て諸の善男子、善女人がこの經典を受持、讀誦するならば、今數へたやうなよい功德をみな得るやうになるであらう。斯ういふやうに信仰といふものが本當に徹底的になつた人は、『已に道場に趣き』即ち釋迦様が佛陀伽耶の菩提樹の下で修行をして覺りをお開きになりました以來、その佛陀伽耶の土地を道場と申して居るのであります。その佛陀伽耶の道場に行つて釋迦様と一緒に修行すると同じことである。何故ならば、佛のお心持はこの經典の中に打込まれてありますから、この經典を信じて、さうして今申すやうにいろ／＼な尊い行ひを積んで行きさへすれば、それは何處に居つても佛陀伽耶の道場に居ると同じことなのである。さうして段々修行して行けば阿耨多羅三藐三菩提、即ち佛の智慧に近付いて行くのである。また『道樹の下』お釋迦様が菩提樹の下に座を占めて御修行になつたといふことが傳へられて居るが、その菩提樹の下のお釋迦様のいらつしやる所に一緒に坐つて居ると同じことである。それは何千年の後であつても、また土地が何千里遠くであつても、そんなことは問題ではない、佛のお心持が解りさへすれば、佛様と同じ所で修行して同じ所で覺つたと少しも違はない、斯う考へて宜しいのである。

それであるから斯ういふ善男子、善女人が坐つて居る所、立つて居る所、經行といふのは道を歩きながら教に付て工夫を凝したのですが、さういふ修行をした所は佛様の歩いた所と同じだから、

其處に塔を建て、さうして天上界の者も人間界の者も、みなこれに對して佛様の塔を供養すると同じやうに供養して宜しい譯であつて、これほど尊いことはない。それであるから世が末になつてだん／＼世の中が難かしくなるに相違ないのであります。その難かしい末の世に生れて、信仰を持ち續けるにはいろ／＼な困難がある。併しながらその困難を冒して信仰を持ち續ける人には、佛様を禮拜し佛を供養すると同じやうに供養しても宜いのである、斯う仰しやつて末の世の信仰を殊におすゝめになつた譯であります。

爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲して偈を説きて言はく、

若し我が滅度の後に 能く此の經を奉持せん

斯の人の福無量なること 上の所説の如し

是れ則ち爲れ 一切の諸の供養を具足し

舍利を以て塔を起て 七寶を以て莊嚴し

表刹甚だ高廣に 漸小にして梵天に至り

寶鈴千萬億にして 風の動かすに妙音を出し

又無量劫に於て この塔に華香諸の瓔珞
 天衣衆の伎樂を供養し 香油蘇燈を然して
 周帀して常に照明するなり 惡世末法の時
 能く是の經を持たん者は 則ち爲れ已に上の如く
 諸の供養を具足するなり 若し能く此の經を持たんは
 則ち佛の現在に 牛頭梅檀を以て
 僧坊を起て、供養し 堂三十二有りて
 高さ八多羅樹 上膳妙なる衣服
 牀臥皆具足し 百千衆の住處
 園林諸の浴池 經行及び禪窟
 種々に皆嚴好にするが如し

そこでまた偈を以て重ねてこの義を宣べられるのであります。若し我が滅度の後に能く此の經を奉持する人があるならば、この人の功德は洵に無量であるが、それは上に申す通りである。即ちこ

れは一切の供養を具足して、さうして佛の舍利の上に塔を建て、七寶を以てその塔を飾つて、さうして感激の意を表するといふのと同じである。またさういふやうに塔を建て、佛を記念する場合に『表刹甚だ高廣に』その塔は非常に大きい塔で、だん／＼上の方に行つて梵天まで届くやうなそんな立派な塔を建て、そこに美しい鈴を澤山かけて、風の動かす毎にその鈴から美妙的な音を出して鳴るやうな塔を建て、また無量劫といふやうな非常に長い年月の間その塔に詣つて花を供へたり、香を供へたり、瓔珞とか或は綺麗な着物などを供へ、音楽を奏し、或は美しい匂ひのする油をともして始終周圍を照して供養の意を表するといふことは實に尊いのであるが、惡世末法の時といつて、世が險惡になつて人の心がみな利己的になつたその場合に、この法華經を信じ續けるならば、それは今申したやうな立派な塔寺を建てないでもこれを建てたと同じことである。それで若しこの經を持つならば、それは佛様の生きていらつしやる間にいろ／＼な事をして佛様に御供養申上げたと同様である。即ち佛の生きていらつしやる時に牛頭梅檀といふやうなよい匂ひのある樹を以て僧坊を建て、佛様やその弟子に差上げたり、それからこの建物は三十二もあつて、高さは八多羅樹ほどの高い建物で、なほその上に美しい着物とか、夜寝るものを悉く具足して供へるとか、また百千の大勢の人が住めるやうな設備を整へ、周圍には庭もあれば樹もあれば、身を洗ふ池もあり、また歩く所の道もあれば、禪窟といつて坐つて靜かに心を練る部屋も具はり、悉く具足するといふこと

は容易ではないけれども、さういふ功徳をしたと同じ功徳を具へたと申すべきである。

詰りこれ等のお言葉を以て見ましても、佛様は末の世を殊に氣にかけていらつしやるといふことがよく判るので、末の世に至つて世の中が險惡な時にこの法華經を信ずれば、佛様の生きていらつしやる時に斯ういふ澤山なものを御供養申上げたのと少しも違はない、斯ういふことを言つて居られる。それで涅槃經の中には七子の喩へといふことがありまして、親が七人の子供を持つて、その子供はみな同じやうに愛し、その間に甲乙はないけれども、その中で一人の子供が病氣に罹れば、親は他の子供を捨て、置いて病氣の子供の爲に非常に心配して世話をする、それは決して他の子供に冷淡なのではないが、病氣だから殊に親が心にかけるのだといふので、
病子に於て心則ち偏に重し

と言つてある。佛様も一切の人に對するお心持がその通りで、佛は平等であつて如何なる者をも疎んぜられることはないけれども、併し世が末になつて來てだん／＼人の心が險惡になつて、多くの迷ひを持ち、多くの罪を犯すやうな者のことを考へられる時に、これが一番佛のお心持にかゝつて居つて忘れられないといふので、

罪重き者に於て心則ち偏に重し

斯う仰しやつて居ります。チョウド病氣の子供のことを餘計心配する親の心持と、それから世が末

になつて險惡な世の中に生れ、自分で覺えざる間に多くの罪を作る者を豫めお考へになつて、その爲に心を碎かれるのと同じことである、斯う言つてあります。それで更に涅槃經の中には、だから自分は末法の世といふことを言ふのだ、お前達が聞くと何故末の世のことばかり言ふかと不思議に思ふだらう、それは子供が病氣をするとその親が心配すると同じだ、世が末になればだん／＼罪を犯す者が多くなつて來る、自然々々に人の心が險惡になるのだから、その事を今考へると氣にかゝつてたまらないのである、だから自分の本當の心を打明けた教を、主として末法の世の爲に遺すのであるといふことを仰しやつたのであります。それがチョウドこの法華經の中にお説きになつたこの意味を更に敷衍して仰せられたといふ風に解釋されて居るのであります。これほど末の世の事をお考へになつたのでありますから、その末の世に生れた者がこの御恩を考へないで、時代に合はないとか、だん／＼世の中が忙しくなればそんな難かしい經典は要らぬとかいふやうなことを申しはならないので、佛様のお心持を察して見れば、どうしても末の世に生れた者の誰かゞ眞心を以てこれを信じ、これをまた普く世の中に弘めるといふことに力を盡さなければならぬ筈であります。

若し信解の心有りて

受持し讀誦し書き

若しは復た人をしても書かしめ 及び經卷を供養し

華香抹香を散じ 須曼瞻蔔

阿提目多伽の 薰油を以て常に之れを然さん

是の如く供養せん者は 無量の功德を得ん

虚空の無邊なるが如く 其の福も亦是の如し

況んや復た此の經を持ちて 兼ねて布施し持戒し

忍辱にして禪定を樂ひ 瞋らず惡口せざらんをや

塔廟を恭敬し 諸比丘に謙下して

自高の心を遠離し 常に智慧を思惟し

問難すること有らんに瞋らず 隨順して爲に解説せん

若し能く是の行を行ぜば 功德量る可からず

若し此の法師の 是の如き徳を成就せるを見ては

應に天華を以て散じ 天衣を其の 覆ひ

頭面に足を接して禮し 心を生じて佛の想の如くすべし

又應に是の念を作すべし 久しからずして道場に詣して

無漏無爲を得 廣く諸の天人を利せんと

其の所住止の處 經行し若しは坐臥し

乃至一偈をも説かん 是の中には應に塔を起て

莊嚴し妙好ならしめて 種々に以て供養すべし

佛子此の地に住すれば 則ち是れ佛受用したまふ

常に其の中に在して 經行し若しは坐臥したまはん

そこで若し信解の心があつて受持し讀誦し、またこれを書き、人をして書かしめるやうなことに力を盡したり、それから經卷を供養して佛の恩に報ゆるといふことに専ら力を盡し、また華香抹香とか、須曼瞻蔔、阿提目多伽といふのはみな匂ひのよいものでありますが、それ等の匂ひのよいものから取つた香を焚き油をとしたりして供養するといふ者は、これは無量の功德を植ゑるのである。供養するといふのはたゞ形だけでなく、本當にこの教の尊いことを心に銘じて、これを世に弘

める爲に力を盡さうといふ決心をするのでありますから、それは實に無量の功德を具へた者である。恰も空の無限であると同じやうに、この教を信じてこれを世に弘める爲に力を盡す者の功德も無限である。況んやまたこの經を持つて行く上に、前に申した布施とか、持戒とか、忍辱とか、禪定とかいふことを毎日實行することに心を向けて、さうして瞋らず惡口せず、他の者の不法な行ひに對しても、たゞこれを憐れだと思つて、こんな間違つた事をするのは分別が足らぬのだから可哀さうだと思つて、決して瞋りを發しないといふやうな修行をするならば、その功德といふものは一層大きい。それで塔廟を恭敬しとは、前に寺は要らぬと言つたけれども、併し自分の信仰が篤くて、その上に佛様の御恩を記念する爲に塔を建て、寺を建てるといふことは、これほど結構なことではないのであるから、さういふ人の建てた塔廟を敬ひ、また大勢の比丘、即ち出家して佛の教を弘める人には、身をへり下つてその努力を認めて、何處までもこれを敬つて行くやうにし、『自高の心を遠離し』自分は法華經が一通り解つて居る、ナニ誰にも譲ることはないといふやうな、そんな心持を起さないで、『常に智慧を思惟して』これは佛智で、佛と同じやうな智慧を具へることばかりを考へて行くといふことが大切であります。少しばかり解つて自分はモウ解つたといふやうな氣になつてはならぬのである。それは幾ら解つたと思つても佛様に比べれば、自分達の智慧分別などはズツト低いものであるから、そんなものを誇るといふやうな心持を止めてしまつて、折角尊い佛の教を學

んだのだから、何時まで長く掛つてもこの修行を續けて、結局佛と同じ智慧を具へるやうになりたい、さうなるまでは決して怠るまいといふことを本當に心がけて行くといふのが、佛慧を思惟するといふことであります。

それだけの心持が出来れば『問難すること有らんに瞋らず』人がどんなに解らないことを持つて來ても、これは解らぬ奴だなどと思はない。何故ならば、自分も佛様から見れば全く愚かな者である、少しばかり解つたと言つても、佛とは段が違ふ、その自分が佛に比べて物の數でないといふことに氣が付いたら、他の者が詰らないことを持かけて來ても、あれは馬鹿だとか、亂暴な者だとか考へられる筈はないのでありますから、これを瞋らず、懇ろにこれに教を説いて聞かせなければならぬ。その教を説いて聞かせる場合には隨順して説かなければならぬ、隨順とは佛のお心持に隨ふのである、自分の私の心を加へてはならぬ。それで人が尋ねたならばよく考へて、佛の御本意を失はないやうに、自分の私の氣持が假にもその中に混じらないやうによく氣を付けて人の問に答へて、さうして自分と同じやうな眞面目な信仰にこれを導き入れるやうにすべきで、斯ういふ人が本當に末の世に至つて教を弘める人でありませう。『能くこの行を行ぜば、功德量るべからず』斯ういふよい行をするならば、其の功德は誠に計り知れないのであります。

それで若し末の世に至つて斯ういふやうな人が出たとしたならば、さうして斯ういふ功德を成就

して實に申分のない行ひをする人があつたならば、あゝ尊い人だと思つてさういふ人を優待し、さういふ人に保護を加へ、さうしてそれを手本としてみなが自分の信仰を勵んで行かなければならぬ。若しさういふ人があれば、花を散らしてその人の徳を讃え、また美しい衣を以てその身を覆ふやうに努め、また頭を地にすりつけて禮拜し、チヨウド佛様にお事へ申すと同じ心持でさういふ人に事へ、これを見習ふてみなが正しい信仰に入るやうに行ひを勵まなければならぬ。

また『應に是の念を作すべし』さういふ非常に勝れた人が出た時には、あゝ立派な人だ『久しからずして道場に詣して』斯ういふ立派な人は間もなくお釋迦様のお覺りになつた所にも行つて、さうして『無漏無爲を得』迷ひもなくなれば、また自己を中心とする心持もなくなつて、廣く諸の天上界、人間界の者を利益することが出来るだらう、斯う思つてさういふ人を敬ぶが宜しい。またさういふ立派な行ひをする人が居る所は、その人が道を歩きながら物を考へて居るのでも、或はその人が坐つて居つても寢て居つても、またはタツタ一句を説明をするやうな所でも、其處は實に尊い所だから、さういふ所に塔を建て非常に美しく飾つて、その人に様々な供養をするといふやうに心掛けなければならぬ。

それで佛は眼の前に見えないでも永遠の命を持つていらつしやるから、さういふ本當に佛の教を信じて世に弘める人が此處に居れば、さういふ頼もしい弟子の居る所に、『則ち是れ佛受用したま

ふ』受用したまふとは其處に止まつていらつしやる、斯う考へて宜しい。さうして何時でも佛様はその頼もしい教を弘める人と一緒の場所に居て、『經行し若しは坐臥したまはん』佛様も一緒について歩いて下され、また一緒に坐つて下され、その人が寢る時にはそこに佛様もいらつしやる。斯う思はれる、だから自分でもさういふ功德を積むやうに努めなければならず、またこの様な教の爲に力を盡す者があつたならば、これは今申すやうに尊い人だと思つて、これを保護し力を添へて、さうして共に俱にこの末法の世に法華經が弘まるやうに力を盡さなければならぬ。斯う仰しやつて、力を極めて末法の世に生れてこの經を信じ、またこれを弘める人をお讃めになつて、皆も斯ういふ心持を持つやうにしるといふことを望まれた譯であります。

前に佛様の眼の前で惡口を言つてもそれは罪が軽いけれども、末の世に至つてこの教を弘める者の邪魔をする罪は大きいといふことを法師品の中に言つてありました。それからこゝではその教を弘める爲に力を盡す人が佛と同じだといふことを言つてありますが、前後相對して見ますと、何と言つても信仰といふことは實際に行ふにある、自分が身に行ひ、またそれを以て人を感化するといふことが信心の極致であるといふことが實によく判るのであります。

それでこゝは本當に堅固な信心の尊いことを説かれたのでありますが、これから先に進むと、それ程尊い行ひが初めから出来るものではないけれども、本當に信仰といふものが尊いものだと思ひ

二〇三四
定めた心持から、斯の如き善き行ひが生み出されて來るといふことを説かれるのが次の隨喜功德品であります。

第百五講 妙法蓮華經隨喜功德品第十八

これから隨喜功德品に入る譯でありますが、この功德を説くことが、前に讀んだ分別功德品と、これから讀まうとする隨喜功德品と、その後の法師功德品といふやうに三つに分けられて居ります。分別功德品は、一應讀みました通り、法華經をたゞ有難いと思つて信ずる者でも、或は深くその内容を味ふて信ずる者でも、或はまた所謂菩薩の行を積んで行くといふやうな者でも、その程度は違ふけれども、兎に角この法華經といふ教を信ずる以上は、詰りこの教に縁が出來たのであるから、その程度の浅い者も、これより進んで深入りすれば、菩薩行を積んで居る者と同様に、結局は佛と同じ智慧を具へるやうになるが、初めから菩薩行を積んで居る者は申すまでもないことである。それで分別とは、いろ／＼種類を分けて、どの種類にしても、お釋迦様が世の中に出て教を説かれる目的が、皆を佛と同じにしてやらうといふことであるから、その意味が本當に解つた者は、覺り方の早い遅いはあらうとも、結局は本當の覺りを得て、佛と同じやうな智慧を具へ、一切の人を救ふやうになれる、斯ういふことを説かれてあるので、分別功德といふ名がついて居ります。所がその修行の仕方もいろ／＼ありますけれども、何分世が末になると世の中が複雑になるから、信仰を求めるといふ心持を起すのが容易ではない、それで兎に角信仰しよう、殊にこの法華經のやう

な教を大事にしようといふ心持を起せば、これは本當によい道が開かれた譯であります。そこでこれから讀みます隨喜功德、即ち法華經の説かれて居ること、また法華經の弘まつて行くことを隨喜する、まだ修行するといふまでに参りませんが、隨喜することが既に法華經に深い縁を持つたのであるから、それが非常に尊いといふことを説かれてあるのが、この隨喜功德品の内容であります。それからその法華經の信仰を世に弘めるに就ては、この法華經を主として弘めることに力を盡す人がなければならぬ、それが即ち法師でありまして、前に法師品といふものもありましたが、その法師の力といふものは非常に大きいのである。それでその法師の功德といふものをまた別にして、更に法師功德品といふことが説かれるのであります。それで斯ういふやうに功德を説くことを三つに分けてあるのですが、何れにしても早い遅いの違ひはあらうとも、法華經を心から信ずるといふことであれば、再びもとの凡夫の境界に戻るやうな虞もない譯でありますから、その功德は莫大であるといふことを纏めて考へられる譯であります。

そこで今日はその三つに分けた中の隨喜功德品に入る譯であります。こゝはその要點を讀めば大體の意味が解るので、簡単に濟ませて次に移りたいと思ひます。

爾の時に彌勒菩薩摩訶薩佛に白して言さく、世尊、若し善男子善女人有

りて、是の法華經を聞きて隨喜せん者は、幾所の福をか得んと、而も偈を説きて言さく、

世尊滅度の後に 其れ是の經を聞くこと有りて

若し能く隨喜せん者は 幾所の福をか得爲き

こゝまでは別に説明する必要もないので、本文だけ掲げて説明を省略し、次を讀んで行きます。

爾の時に佛、彌勒菩薩摩訶薩に告たまはく、阿逸多、如來の滅後に、若し比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷及び餘の智者、若しは長若しは幼、是の經を聞きて隨喜し已りて、法會より出で、餘處に至らん、若しは僧房に在り、若しは空閑の地、若しは城邑巷陌聚落田里にして、其の所聞の如く、父母宗親、善友知識の爲に、力に隨ひて演說せん。是の諸人等聞き已りて隨喜して、復た行いて轉教せん。餘の人聞き已りて、亦隨喜して轉教せん。是の如く展轉して第五十に至らん。

詰りこゝは、法華經を説くのを聞いて本當に尊いと思つたから、その喜びを自分一人に私しない

で、大勢に分けるやうにしなければならぬ、それが非常な功德だ、斯う申すのであります。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷といふのは、普通在家の者、或は出家の者のことですが、こゝでは凡ゆる佛教の信者といふことであります。それから『及び餘の智者』といふのは、まだ深くお經を信ずるといふまでにはならないが、何か信ずることが必要だと考へて居る所の、世間の有力な者のことでせう。さういふ者で、それは年が若くても年が長じて居つても構はないが、兎に角さういふ者がこの法華經を聞いて、成ほど有難い教だ、さういふ教なら一つ自分もこれから信じよう、また世の中にさういふ教が弘まつたならばさぞ宜からう、斯う思つて、『法會より出で』その法華經を説いて居る場所から出まして他所へ行つて、その行つた先が坊さんの居る所であつても、或は空閑の地といふのは、山の中の林のやうな静かな所であつても、或は城邑巷陌といつて、町の賑やかな所であつても、或は聚落、田里、田舎の村里のやうな所であつても、何處へ行つても自分が聞いたことが非常に尊いから、それで聞いた通りを皆に説いて聞かせて、今日斯ういふ説を聞いて來た、これは大變尊いと思ふからして、お前達も一緒にこの教を聞いたら宜からう、斯う言つてすゝめるのであります。そのすゝめる相手は、自分の親であらうが、或は親戚の者であらうが、自分の友達であらうが、或は知識といふのは知合といふやうな意味で、友達といふほど親しくない、顔でも知つて居る近所隣の人といふやうな者のことでありませう。さういふやうな人に對して力に隨つて演説す

る、この力に隨つてといふことは、無論自分がまだ深く研究しなければ、人の教を説くのを聞いてもスツリ解る譯ではないが、併し自分の解つた程度で宜しいから、その力に隨つて説いて、實は斯ういふ話を聞いた、自分にはその深い意味は解らないけれども、自分の聞いた所では斯ういふ意味だと言つて説く、さうすれば、初め十あるものゝ二つ三つだけ説いても、それは兎に角尊い佛の教でありますから、その教を聞いた者はどれだけか感激するに相違ない。それでその教を聞いた幾人かの者は、それを聞き已つて隨喜して『復た行いて轉教せん』詰り他へ行つて、實はまた聞きだけれども斯ういふことを説く人が居るさうだ、その教は實によい教だ、斯う言つて第三の人に説く、さうすると第三の人がそれを聞いてやはり隨喜して更に轉教する。それでさういふやうに段々次から次と説いて行けば、また聞きのみまた聞きといふことになるから、初めの趣意とは可なり違つて來るに相違ないが、もと／＼佛の尊い教でありますから、どんなに變つてもまるで變つてしまふ筈はないから、それで甲の人からこの人、乙の人から丙の人に傳へるといふやうにして五十人目の人になつたら、それは随分もとの教と違ふに相違ないが、それでも初めが法華經といふやうな佛様の魂を打込んだ教であるから、五十人目の人が洵に有難いと思つて隨喜する功德は、實に大きいものだといはれるのであります。

これは何でもないことのやうであります、物を學ぶといふ上に於ては非常によい教だと思ひま

す。よい教をほんの少しばかり學んでも、それは詰らない教の全體を學んだよりも無論よいのでありますから、斯ういふ心持は非常に大事であります。餘計な話でありますが、私は中學五年生の時に、亡くなつた齋藤先生に就て英語を習つた。先生はあゝいふ立派な英語學者でありますから、吾のやうな中學生を教へるのは惜しい先生であります。喜んでいろく教へて呉れた。それでその時分シェークスピア物語などを教へて呉れましたが、併し中學五年生位ではシェークスピアなどは迎も讀めないもので、その事を先生に言ふと、それは固よりお前達が讀んでも解らない、併しながらその中の一行解つても大變よい、だから全部解るといふことを私も望みはしないから、字引を一生懸命引張つて讀んで見ろ、讀んだらキット得る所がある、斯う言はれたので、字引を引きながら讀んだことを覚えて居ります。無論何も解りはしないけれども、骨折つて讀みますと何だか好い氣分になつたことを覚えて居ります。その時つくづく考へたのですが、齋藤先生の教へ方は大變有難い、本當に尊いものは少し味つても大變價值がある、詰らないものを全部讀むより餘ほど宜いといふことを感じましたが、今この所を讀んでもさういふやうな意味で、本當に佛様の魂を打込まれたものゝほんの一小部分傳はつても、それは大變大きな功德がある、詰らないものを澤山習ふより餘ほど價值があるといふ風に解釋すれば、佛教のことばかりでなく、他のことにも應用の出来る洵によい教訓であると思ひます。

それで今讀んだ以外のことは、この意味を敷衍したのでありますから、あとは省略して、本文だけ掲げて次に移ることに致します。

阿逸多。其の第五十の善男子善女人の隨喜の功德を、我今之を説かん。
 汝當に能く聽くべし。若し四百萬億阿僧祇の世界の六趣四生の衆生、卵生、胎生、溼生、化生、若しは有形無形、有想、無想、非有想非無想、無足二足、四足多足、是の如き等の衆生の數に在らん者に、人有りて福を求めて、其の所欲に隨ひて娛樂の具、皆之に給與せん。一々の衆生に、閻浮提に滿てらん金銀、瑠瑠磔磔、碼碼珊瑚琥珀、諸の妙なる珍寶、及び象馬車乘、七寶所成の宮殿樓閣等を與へん。是の大施主是の如く布施すること八十年を滿ち已りて、是の念を作さく、我已に衆生に娛樂の具を施すこと意の所欲に隨ふ。然るに此の衆生皆已に衰老して、年八十を過ぎ、髮白く面皺みて、將に死せんこと久しからじ。我當に佛法を以て之を訓導すべしと。即ち此の衆生を集めて宣布法化し、示教利喜して、

一時に皆須陀洹道、斯陀含道、阿那含道、阿羅漢道を得、諸の有漏を盡し、深禪定に於て皆自在を得、八解脫を具せしめん。汝が意に於て云何是の大施主の所得の功德、寧ろ爲れ多しや不やと。彌勒佛に白して言さく、世尊、是の人の功德甚だ多くして無量無邊なり。若し是の施主但だ衆生に一切の樂具を施さんすら、功德無量ならん。何に況んや阿羅漢果を得しめんをやと。佛彌勒に告げたまはく、我今分明に汝に語る。是の一切の樂具を以て、四百萬億阿僧祇の世界、六趣の衆生に施し、又阿羅漢果を得しめん、所徳の功德は、是の第五十の人の法華經の一偈を聞きて隨喜せん功德に如かじ。百分、千分、百千萬億分にして、其の一にも及ばじ。乃至算數譬論も、知ること能はざる所なり、阿逸多、是の如く第五十人、展轉して法華經を聞きて隨喜せん功德、尙ほ無量無邊阿僧祇なり。何に況んや、最初會中に於て、聞きて隨喜せん者をや、其福復た勝れたること無量無邊阿僧祇にして比することを得べからず。又阿逸

多若し人は是の經の爲の故に、僧房に往詣して、若しは坐し若しは立ち、須臾も聽受せん。是の功德に緣りて身を轉じて生れん所には、好き上妙の象馬車乘、珍寶の輦輿を得、及び天宮に乗ぜん。若し復た人有りて、講法の處に於て坐せん。更に人の來ること有らんに、勸めて坐して聽かしめん。若しは座を分ちて坐せしめん。是の人の功德は身を轉じて、帝釋の坐處、若しは梵天王の坐處、若しは轉輪聖王の所坐の處を得ん。阿逸多、若し復た人有りて餘人に語りて言く、經有り法華と名けたてまつる。共に往いて聽くべしと。即ち其の教を受けて、乃至須臾の間も聞かん。是の人の功德は、身を轉じて陀羅尼菩薩と共に一處に生ずることを得ん。利根にして智慧あらん。百千萬世終に瘡癒ならず。口の氣臭からず、舌に常に病無く、口も亦病無けん。齒垢黑ならず、黄ならず、疎ならず、亦缺落せず、差はず曲らず、唇下垂せず亦褻縮せず、麤澁ならず瘡疹ならず、亦缺壞ならず、亦瞞邪ならず、厚からず大ならず、亦黧

黒ならず、諸の惡むべきこと無けん。鼻匾匱ならず亦曲戻ならず。面色黒からず、亦狭長ならず亦窵曲ならず、一切の喜ぶ可からざる相有ること無けん。唇舌牙齒悉く皆嚴好ならん。鼻脩くして高直に面貌圓滿し、眉高くして長く、額廣く平正にして人相具足せん。世々に生れん所には佛を見たてまつり、法を聞きて教誨を信受せん。阿逸多、汝且く是を觀ぜよ。一人を勸めて、往いて法を聽かしむる功德此の如し。何に況や一心に、聽き説き讀誦し、而も大衆に於て人の爲に分別し、説の如く修行せんをや。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

若し人法會に於て 是の經典を聞くことを得て
 乃至一偈に於ても 隨喜して佗の爲に説かん
 是の如く展轉して教ゆること 第五十に至らん
 最後の人の福を獲んこと 今當に之を分別すべし

如し大施主有りて 無量の衆に供給すること

具に八十歳を満て、 意の所欲に隨はん

彼の衰老の相の 髮白くして面皺み

齒疎にして形枯竭せるを見て 其の死せんこと久しからじ

我今應當に教へて 道果を得しむべしと念じて

即ち爲に方便して 涅槃眞實の法を説かん

世は皆牢固ならざること 水沫泡焰の如し

汝等咸く應當に 疾く遠離の心を生ずべしと

諸人は是の法を聞きて 皆阿羅漢を得

六神通三明八解脱を具足せん 最後第五十の

一偈を聞きて隨喜せん 是の人の福彼に勝れたること

譬諭することを爲可からず 是の如く展轉して聞く

其の福尚ほ無量なり 何に況んや法會に於て

初^{はじ}めて聞^ききて隨^ず喜^きせん者^{もの}をや 若^もし一^{ひと}人を勸^{すす}めて
 將^{しょう}引^{いん}して法^{はつ}華^けを聽^きかしむること有^ありて 言^いはん
 此^この經^{きやう}は深^{じん}妙^{めう}なり 千^{せん}萬^{まん}劫^{ごつ}にも遇^あひ難^{がた}しと
 即^{すま}ち教^{しやう}を受^うけて往^ゆきて聽^きくこと 乃^{すな}至^{いた}須^{しよ}臬^おも聞^きかん
 斯^この人の福^{ふく}報^{ほう} 今^{いま}當^まに分^{ぶん}別^{べつ}し説^とくべし
 世^よ々に口^{くち}の患^{あまひ}無^なく 齒^は疎^そ黄^{わう}黑^{こく}ならず
 脣^{くちびる}厚^{あつ}く褰^{けん}缺^{けつ}ならず 惡^{にく}む可^べき相^{さう}有^あること無^なけん
 舌^{した}乾^かき黑^{こく}短^{たん}ならず 鼻^{はな}高^{かう}脩^{しう}にして且^{また}直^{ちか}からん
 額^{ひたい}廣^{ひろ}くして平^{ひら}正^{しやう}に 面^{めん}目^{もく}悉^{ことごと}く端^{たん}嚴^{ごん}にして
 人^{ひと}に見^まえんと喜^{ねが}はるゝことを爲^なん 口^{くち}の氣^い臭^{しう}穢^み無^なくして
 優^う鉢^{はつ}華^けの香^{かう} 當^{つね}に其^{その}の口^{くち}より出^いでん 法^{はつ}華^け經^{きやう}を聽^きかんと欲^{ほつ}して
 若^もし故^こに僧^{そう}房^{ぼう}に詣^{いた}り 法^{はつ}華^け經^{きやう}を聽^きかんと欲^{ほつ}して
 須^{しよ}臬^おも聞^ききて歡^{くわん}喜^ぎせん 今^{いま}當^まに其^{その}の福^{ふく}を説^とくべし

後^{のち}に天^{てん}人^{じん}の中^{なか}に生^なれて 妙^{たへ}なる象^{さう}馬^ま車^{しや}
 珍^{ちん}寶^{ぼう}の輦^{れん}輿^よを得^え 及^{およ}び天^{てん}の宮^{きやう}殿^{てん}に乗^{じやう}ぜん
 若^もし講^{かう}法^{ぽう}の處^{ところ}に於^おいて 人^{ひと}を勸^{すす}めて坐^ざして經^{きやう}を聽^きかしめん
 是^この福^{ふく}の因^{いん}緣^{ねん}を以^{もつ}て 釋^{しやく}梵^{ぼん}轉^{てん}輪^{りん}の座^ざを得^えん
 何^{いか}に況^{いは}んや一^{しん}心^{しん}に聽^きき 其^{その}の義^ぎ趣^{しゆ}を解^げ説^{せつ}し
 説^{せつ}の如^{ごと}く修^{しゆ}行^{ぎやう}せんをや 其^{その}の福^{ふく}限^{かぎ}る可^べからず

妙法蓮華經法師功德品第十九

六根清淨

次は法師功德品に入りますが、この法師功德品の初めの所には、法華經を弘めれば六根が清淨になるといふことを説かれて居ります。六根といふのは眼、耳、鼻、舌、身、意のことであり、吾々が物を知るのに眼で見、耳で聞き、鼻で嗅ぎ、舌で味はひ、身で觸れ、意にその存在を知るといふのが六根であります。その六根が清淨になるといふのは、物を見るとか聞くとか吾々が世の中で凡ゆる經驗を積みますが、その經驗の一つ一つに迷ひがなくなり、本當に淨らかな眞直ぐな心持を以て物を見ることも出来るといふのが六根清淨といふことであります。即ち心の根本が佛と通ひ合ふやうになれば、見る所聞く所一つ一つが皆尊い、みな淨らかなになる、斯ういふことを言つて居ります。それで斯ういふ聲も聞える、あゝいふ物の姿も見るといふやうな形容が細かに説いてありますが、それは本文をお読み下されば解ることであり、一々の説明を略します。

爾の時に佛常精進菩薩摩訶薩に告げたまはく、若し善男子善女人、是の法華經を受持し、若しは讀み若しは誦し、若しは解説し若しは書寫せん。是の人は當に八百の眼の功德、千二百の耳の功德、八百の鼻の功德、千

二百の舌の功德、八百の身の功德、千二百の意の功德を得べし。是の功德を以て、六根を莊嚴して、皆清淨ならしめん。是の善男子善女人は、父母所生の清淨の肉眼を以て、三千大千世界の内外の所有る山林河海を見ること、下阿鼻地獄に至り、上有頂に至らん。亦其の中は一切衆生を見、及び業の因縁、果報の生ずる處、悉く見悉く知らん。爾の時に世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、
若し大衆の中に於て 無所畏の心を以て
是の法華經を説かん 汝其の功德を聽け
是の人は八百の功德ある殊勝の眼を得ん
是を以て莊嚴するが故に 其の目甚だ清淨ならん
父母所生の眼を以て 悉く三千界の
内外の彌樓山 須彌及び鐵圍
并に諸の山林 大海江河水を見ること

下阿鼻獄に至り

上有頂天に至らん

其の中の諸の衆生

一切皆悉く見ん

未だ天眼を得ずと雖も

肉眼の力は是の如くならん

復た次に、常精進、若し善男子、善女人、此の經を受持し、若しは讀み若しは誦し、若しは解説し若しは書寫せん。千二百の耳の功德を得ん。是の清淨の耳を以て、三千大千世界の、下阿鼻地獄に至り、上有頂に至る。其の中の内外の、種々の所有る、語言の音聲、象聲、馬聲、牛聲、車聲、啼哭聲、愁歎聲、螺聲、鼓聲、鐘聲、鈴聲、笑聲、語聲、男聲、女聲、童子聲、童女聲、法聲、非法聲、苦聲、樂聲、凡夫聲、聖人聲、喜聲、不喜聲、天聲、龍聲、夜叉聲、乾闥婆聲、阿脩羅聲、迦樓羅聲、緊那羅聲、摩睺羅伽聲、火聲、水聲、風聲、地獄聲、畜生聲、餓鬼聲、比丘聲、比丘尼聲、聲聞聲、辟支佛聲、菩薩聲、佛聲を聞かん。要を以て之を言はゞ、三千大千世界の中の、一切内外の、所有る諸の聲、未だ

天耳を得ずと雖も、父母所生の清淨の常の耳を以て、皆悉く聞き知らん。是の如く種種の音聲を分別すとも、而も耳根を壞らず。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく

父母所生の耳

清淨にして濁穢無く

此の常の耳を以て

三千世界の聲を聞かん

象馬車牛の聲

鐘鈴螺鼓の聲

琴瑟笙篳の聲

簫笛の音聲

清淨好歌の聲

之を聽きて著せず

無數種の人の聲

聞きて悉く能く解了せん

又諸天の聲

微妙の歌の音を聞き

及び男女の聲

童子童女の聲を聞かん

山川險谷の中の

迦陵頻伽の聲

命命等の諸鳥

悉く其の音聲を聞かん

地獄の衆の苦痛 種種の楚毒の聲
 餓鬼の飢渴に逼られて 飲食を求索する聲
 諸の阿脩羅等 大海の邊に居在して
 自ら共に言語する時 大音聲を出すとも
 是の如き說法者は 此の間に安住して
 遙に是の衆の聲を聞きて 耳根を壞らさず
 十方世界の中の 禽獸の鳴きて相呼ぶ
 其の說法の人 此に於て悉く之を聞かん
 其の諸の梵天上 光音及び徧淨
 乃至有頂天 言語の音聲
 法師此に住して 悉く皆之を聞くことを得ん
 一切の比丘衆 及び諸の比丘尼の
 若しは經典を讀誦し 若しは佗人の爲に説かん

法師此に住して 悉く皆之を聞くことを得ん
 復た諸の菩薩有りて 經法を讀誦し
 若しは佗人の爲に説き 撰集して其の義を解せん
 是の如き諸の音聲 悉く皆之を聞くことを得ん
 諸佛大聖尊の 衆生を教化したまふ者
 諸の大會の中に於て 微妙の法を演説したまふ
 此の法華を持たん者は 悉く皆之を聞くことを得ん
 三千大千界の 内外の諸の音聲
 下阿鼻獄に至り 上有頂天に至るまで
 皆其の音聲を聞きて 耳根を壞らさず
 其の耳聰利なるが故に 悉く能く分別して知らん
 是の法華を持たん者は 未だ天耳を得ずと雖ども
 但所生の耳を用ゆるに 功德已に是の如くならん

復た次に常精進、若し善男子、善女人、是の經を受持し、若しは讀み若しは誦し、若しは解説し若しは書寫せん。八百の鼻の功德を成就せん。是の清淨の鼻根を以て、三千大千世界の、上下内外の、種種の諸の香を聞かん。須曼那華香、闍提華香、末利華香、瞻蔔華香、波羅羅華香、赤蓮華香、青蓮華香、白蓮華香、華樹香、果樹香、梅檀香、沈水香、多摩羅跋香、多伽羅香、及び千萬種の和香、若しは抹せる若しは丸せる、若しは塗香、是の經を持たん者は、此の間に於て、住して、悉く能く分別せん。又復た衆生の香、象の香、馬の香、牛羊等の香、男の香、女の香、童子の香、童女の香、及び艸木叢林の香を別ち知らん。若しは近き、若しは遠き、所有る諸の香、悉く皆聞くことを得て、分別して錯らず。是の經を持たん者は、此に住せりと雖も、亦天上、諸天の香を聞かん、波利質多羅、拘鞞陀羅樹香、及び曼陀羅華香、摩訶曼陀羅華香、曼殊沙華香、摩訶曼殊沙華香、梅檀沈水、種種抹香、諸の雜華香、是の如き等の

天香和合して出す所の香、聞き知らざること無けん。又諸天の身の香を聞かん、釋提桓因の、勝殿の上に在りて、五欲に娛樂し、嬉戲する時の香、若しは妙法堂の上に在りて、切利の諸天の爲に、說法する時の香、若しは諸の園に於て遊戯する時の香、及び餘の天等の、男女の身の香、皆悉く遙に聞かん。是の如く展轉して、乃ち梵天に至り、上有頂に至る。諸天の身の香、亦皆之を聞き、并に諸天の焼く所の香を聞かん。及び聲聞の香、辟支佛の香、菩薩の香、諸佛の身の香、亦皆遙に聞きて、其の所在を知らん。此の香を聞くと雖も、然も鼻根に於て壞らず錯らず。若し分別して他人の爲に説かんと欲せば、憶念して謬らず。爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく

是の人は鼻清淨にして 此の世界の中に於て
 若しは香はしき若しは臭き物 種種悉く聞き知らん

須曼那闍提 多摩羅梅檀

沈水及び桂香 種種の華香の香

及び衆生の香 男子女人の香を知らん

説法者は遠く住して 香を聞きて所在を知らん

大勢の轉輪王 小轉輪及び子

群臣諸の宮人 香を聞きて所在を知らん

身に著たる所の珍寶 及び地中の寶藏

轉輪王の寶女 香を聞きて所在を知らん

諸人の嚴身の具 衣服及び瓔珞

種種の塗れる所の者 聞きて則ち其の身を知らん

諸天の若しは行坐 遊戯及び神變

是の法華を持たん者は 香を聞きて悉く能く知らん

諸樹の華果實 及び蘇油の香氣

持經者は此に住して 悉く其の所在を知らん

諸山の深く峻しき處

衆生中に在る者 香を聞きて皆能く知らん

鐵圍山大海 地中の諸の衆生

持經者は香を聞きて 悉く其の所在を知らん

阿脩羅の男女 及び其の諸の眷屬の

鬪諍し遊戯する時 香を聞きて皆能く知らん

曠野險隘の處の 師子象虎狼

野牛水牛等 香を聞きて所在を知らん

若し懷妊せる者有りて 未だ其の男女

無根及び非人を辨へざらん 香を聞きて悉く能く知らん

香を聞く力を以ての故に 其の初めて懷妊し

成就し成就せざる 安樂にして福子を産まんことを知らん

香を聞く力を以ての故に 男女の所念

染欲癡恚の心を知り 亦善を修する者を知らん
 地中の衆の伏藏 金銀諸の珍寶
 銅器の盛れる所 香を聞きて悉く能く知らん
 種種の諸の瓔珞 能く其の價を識ること無き
 香を聞きて貴賤 出處及び所在を知らん
 天上の諸華等の 曼陀曼殊沙
 波利質多樹 香を聞きて悉く能く知らん
 天上の諸の宮殿 上中下の差別
 衆の寶華の莊嚴せる 香を聞きて悉く能く知らん
 天の園林勝殿 諸觀妙法堂
 中に在りて娛樂する 香を聞きて悉く能く知らん
 諸天の若しは法を聽き 或は五欲を受くる時
 來往行坐臥する 香を聞きて悉く能く知らん

天女の著たる所の衣 好き華香を以て莊嚴して
 周旋し遊戯する時 香を聞きて悉く能く知らん
 是の如く展轉し上りて 乃ち梵天に至る
 入禪出禪の者 香を聞きて悉く能く知らん
 光音徧淨天 乃ち有頂に至る
 初生及び退沒 香を聞きて悉く能く知らん
 諸の比丘衆等の 法に於て常に精進し
 若しは坐し若しは經行し 及び經法を讀誦し
 或は林樹の下に在りて 專精にして坐禪する
 持經者は香を聞きて 悉く其の所在を知らん
 菩薩の志 堅固にして 坐禪し若しは經を讀み
 或は人の爲に說法する 香を聞きて悉く能く知らん
 在在方の世尊 一切に恭敬せられて

衆を感んで説法したまふ 香を聞きて悉く能く知らん
衆生の佛前に在りて 香を聞きて皆歡喜し

法の如く修行する 香を聞きて悉く能く知らん
未だ菩薩の 無漏法生の鼻を得ずと雖も

是の持經者は 先づ此の鼻の相を得ん

復た次に常精進、若し善男子善女人、是の經を受持し、若しは讀み若しは誦し、若しは解説し若しは書寫せん。千二百の舌の功德を得ん。若しは好若しは醜、若しは美若しは不美、及び諸の苦澁の物、其の舌根に在れば、皆變じて上味と成り、天の甘露の如くにして、美からざる者無けん。若し舌根を以て、大衆の中に於て、演説する所有らんに、深妙の聲を能く出して、其の心に入れて、皆歡喜し快樂せしめん。又諸の天子天女、釋梵諸天、是の深妙の音聲の演説する所有る、言論の次第を聞きて、皆悉く來り聽かん。及び諸の龍、龍女、夜叉、夜叉女、乾闥婆、乾

闥婆女、阿脩羅、阿脩羅女、迦樓羅、迦樓羅女、緊那羅、緊那羅女、摩睺羅伽、摩睺羅伽女、法を聽かんが爲の故に、皆來りて、親近し、恭敬供養せん。及び比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、國王、王子、群臣、眷屬、小轉輪王、大轉輪王、七寶千子、内外の眷屬、其の宮殿に乗じて、俱に來りて法を聽かん。是の菩薩、善く説法するを以ての故に、婆羅門居士、國內人民、其の形壽を盡すまで、隨時供養せん。又諸の聲聞、辟支佛、菩薩、諸佛、常に樂みて、之れを見たまはん。是の人の所在の方面には、諸佛皆其處に向つて、法を説きたまはん。悉く能く一切の佛法を受持し、又能く深妙の法音を出さん。爾の時に世尊、重ねて是の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

是の人は舌根淨くして 終に惡味を受けず
其の食噉する所有るは 悉く皆甘露と成らん
深淨の妙聲を以て 大衆に於て法を説かん

諸の因縁論を以て 衆生の心を引導せん
 聞く者皆歡喜して 諸の上供養を設けん
 諸の天龍夜叉 及び阿脩羅等
 皆恭敬の心を以て 共に來たりて法を聽かん
 是の說法の人 若し妙音を以て
 三千界に徧滿せんと欲せば 意に隨ひて即ち能く至らん
 大小の轉輪王 及び千子眷屬
 合掌し恭敬の心を以て 常に來りて法を聽受せん
 諸の天龍夜叉 羅刹毗舍闍
 亦歡喜の心を以て 常に樂ひ來たり供養せん
 梵天王魔王 自在大自在
 是の如き諸の天衆 常に其の所に來至せん
 諸佛及び弟子 其の說法の音を聞きて

常に念じて守護し 或る時は爲に身を現はしたまはん
 復た次に常精進、若し善男子、善女人、是の經を受持し、若しは讀み若
 しは誦し、若しは解説し若しは書寫せん。八百の身の功德を得て、清淨
 の身、淨瑠璃の如くにして、衆生見んと喜ぶを得ん。其の身淨きが故に、
 三千大千世界の衆生の、生ずる時死する時、上下好醜、善處惡處に生ず
 る、悉く中に於て現ぜん。及び鐵圍山、大鐵圍山、彌樓山、摩訶彌樓山
 等の、諸の山王、及び其の中の衆生、悉く中に於て現ぜん、下阿鼻地獄
 に至り、上有頂に至る。所有及び衆生、悉く中に於て現ぜん。若しは聲
 聞、辟支佛、菩薩、諸佛の說法する。皆身中に於て、其の色像を現ぜん。
 爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、
 若し法華經を持たんは 其の身甚だ清淨なること
 彼の淨瑠璃の如くにして 衆生皆見んと喜はん
 又淨明なる鏡に 悉く諸の色像を見るが如く

菩薩淨身に於て 皆世の所有を見ん

唯獨り自明了にして 餘人の見ざる所ならん

三千世界の中の 一切の諸の羣萌

天人阿脩羅 地獄鬼畜生

是の如き諸の色像 皆身中に於て現ぜん

諸天等の宮殿 乃ち有頂に至る

鐵圍及び彌樓 摩訶彌樓山

諸の大海水等 皆身中に於て現ぜん

諸佛及び聲聞 佛子菩薩等

若しは獨り若しは衆に在りて 說法する悉く皆現ぜん

未だ無漏法性の 妙身を得ずと雖も

清淨の常の體を以て 一切中に於て現ぜん

復た次に常精進、若し善男子、善女人、如來の滅後に、是の經を受持し、

若しは讀み若しは誦し、若しは解説し若しは書寫せん。千二百の意の功德を得ん。是の清淨の意根を以て、乃至一偈一句を聞くに、無量無邊の義に通達せん。是の義を解り已りて、能く一句一偈を演說すること、一月四月、乃至一歲に至らん。

こゝで一應説明して置きたいと思ふことは、詰り法師といはれるやうな人が教を説く場合には、假令佛教のことを言はないで世間話をするのでも、自からその中に佛教の深い信仰が含まれて、人の心を動かして行く、斯ういふことを説かれて居ります。

諸の所説の法、其の義趣に隨ひて、皆實相を相違背せじ。若し俗間の經書、治世の語言、資生の業等を説かんも、皆正法に順ぜん。

この一節がそれでありませう。本當に信仰がシツカリと立つて、佛のお心持と相通するやうな心持であると、その人の口に説く言葉といふものはみな「其の義趣に隨ふ」義趣といふのは佛の教を説きになるその御趣意に一致して來るといふことであります。勿論佛でない者が教を説くのでありますから、佛様ほどには完全に行かないにしても、兎に角信仰がシツカリして居れば、佛様の御趣意と一致して來て實相と相違背しないやうになる。實相とは即ち絶對の理であります、絶對の理

を違背しないだけのことは出来る、本當の深い理を説くといふことは難かしいか知らんけれども、兎に角正しい理に背かないことはキツト言へる。さういふやうになれば『俗間の經書』即ち佛教以外の經書、例へば論語とか孟子とか老子とか、或はその他世間の倫理道德に關係するものが俗間の經書に當るのであります。それから『治世の語言』といふのは法律とか政治といふやうな、世の中を治めることに關する所の様々な説のことです。それから『資生の業』といふのは今の商工業のやうなものであります。さういふやうなことに就て話すのでも、心にシツカリした信仰があれば、法律の話をして、商賣の話をして、教育の話をして、それがみな『正法に順ぜん』佛様の御精神と一致するやうになるので、そこまで行かなければいかぬ、たゞ佛教を説いて佛教を弘めるといふだけではまだ本當ではないので、心に深い信仰があれば、世間的の商賣の話をしてながら教が弘まる、また法律の話をしてながら、それで教が弘まる、それがみな正法に順ずる、即ち佛様の御精神に一致して行くから、そこで初めて、前に申し上げましたやうな、この娑婆世界が淨土になるといふやうな大きな働きが出来るといふのであります。

これは實際信仰といふものゝ力をよく明らかにした言葉と思はれるのであります。そこまで行くのは容易ではないでありませうけれども、併しお釋迦様の弟子の中でも維摩居士といふやうな人は大富豪でありまして、凡ゆる事業を經營して居た人でありまして、その事業を經營することに

依つて大勢の人を救ふて、一切の人に本當の信仰を持たせたといふことをいはれて居ります。それで維摩居士が自分と同じやうな多くの富豪の息子達が集まつた所で、お前達出家しないかといふことをすゝめた。所がその息子達は意味が判らないから、出家をしろと言つても自分達はまだ親がある。親の承知を得ないで出家など出来るものかと言つた。そこで維摩居士が言ふには、いや出家といふのはさういふものではない、自分などは現に出家して居るのだ、斯う言ひまして、出家に身出家と心出家の二つがあるといふことを説きました。さうしてお前達にすゝめるのは心出家だ、それは商賣して居ても宜い、また今のやうな富豪の生活をして居ても宜い、その生活をしながらその周圍の出來事に囚はれないで、相接する人をみな佛の教に導くやうな行ひが出来れば、それが心の出家なので、それをお前達にすゝめるのだ、斯う言つたので、富豪の子供達が非常に感激したといふことが維摩經の中に出て居ります。維摩居士の如きは所謂心出家をした人でありまして、現に自分は事業を經營して居るのであります。俗間の經書、治世の語言、資生の業等を説きながら、それが正法に順ずるのでから、その功德といふものは實に大きいので、お釋迦様も、自分の心を得た者だと言つて維摩居士をお讃めになつて居られるのであります。斯ういふことを考へて見ると、信仰の及ぼす力がどれほどであるかといふことが略々解ると思ふのであります。

この法師功德品は、大體前に申上げたことの繰返しのやうに思ひますから、これだけにして、例

の如く本文についてお読み願ひます。

三千大千世界の、六趣の衆生、心の行ずる所、心の動作する所、心の戯論する所、皆悉く之れを知らん。未だ無漏の智慧を得ずと雖も、而も其の意根の、清淨なること此の如くならん。是の人の思惟し、籌量し言説する所有らんは、皆是れ佛法にして、眞實ならざること無く、亦是れ先佛の、經の中の所説ならん。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して偈を説きて言はく

是の人は意清淨に 明利にして穢濁無く

此の妙なる意根を以て 上中下の法を知り

乃至一偈を聞くに 無量の義に通達せん

次第に法の如く説くこと 月四月より歳に至らん

是の世界内外の 一切諸の衆生

若しは天龍及び人 夜叉鬼神等

其の六趣の中に在る 所念の若干種

法華を持つつの報は 一時に皆悉く知らん

十方無数の佛 百福莊嚴の相あらん

衆生の爲に説法したまふ 悉く聞きて能く受持せん

無量の義を思惟し 説法すること亦無量にして

終始忘れ錯まらず 法華を持つつを以ての故に

悉く諸法の相を知り 義に隨ひて次第を識り

名字語言に達して 知れる所の如く演説せん

此の人の所説有るは 皆是れ先佛の法ならん

此の法を演ぶるを以ての故に 衆に於て畏るゝ所無けん

法華經を持つつ者は 意根淨きこと斯くの如くならん

未だ無漏を得ずと雖も 先づ是の如き相有らん

501
47

是の人此の經を持ちて 希有の地に安住して
一切衆生の 歡喜して愛敬することを爲ん
能く千萬種の 善巧の語言を以て
分別して演說せん 法華經を持つが故なり

昭和十八年九月十九日印刷
昭和十八年九月二十日發行 (非賣品)

東京都品川区西品川三丁目八百拾四番地

編輯者 戸根川三郎

東京都牛込區藥王寺拾四番地

印刷者 中黒秀雄

東京都麹町區丸ノ内二丁目四番地

印刷所 三菱本社總務部印刷工場

東京都麹町區丸ノ内三丁目四番地(三菱本社内)

發行所 慧水會

終

